

514

226

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5

始







世界一周の旅行紙一平

大正  
13. 4. 24  
内交



## 序

世界一周をせぬ前とした後とどう違ふか？

これを先づ言つてみる。第一に外人に逢つても怖毛おそ毛がつかなくなる。第二にこの頃では少し知識階級の集りになると中の半数は洋行の経験のある人々である。話題は一度は洋行談に向く。兎にも角にもその話の仲間入りが出来る。第三、洋行歸りの大風呂敷にあてられなくなる。第四、西洋の事について大概、たか、を、く、い、る横着が出来た。第五、多少、人が尊敬して呉れる。第六、多少、人がハイカラに見て呉れる。第七、多少西洋文明好きになる。第八、西洋料理を非常な御馳走と思つて飛び付くさ、も、し、さ、が、尠くなる。第九、日本内地の旅行でも成可く洋式ホテルの便利を利用するやうになる。第十、帝國ホテルをわが客間のやうな顔をして客へ案内するやうになる。通俗方面では先づざつと、こんなものである。

若し一段深く立入つて思想上の影響を述べる事になると、これは中々一紙半紙の盡す處で



無い。又この書の内容が自づと説明する事と思ふ。

こゝに人ありて世界一周はすべきものかせぬものかと聴かれたら、筆者は躊躇無く答へるであらう『一度は是非、して置く必要があるね』と。

斯くの如くして置く必要がある世界一周を筆者にさせてそして、して置く必要があると他人に明白に答へる事を得しめるやうにした人は雑誌「婦女界」社主都河龍氏である。氏に深く感謝する。

單に漫画の一面からいつても、日本の漫画家から世界一周者を出した事は對社會的には漫画の威容を増し藝術的には幾分の刺激と土産を齎した事と信する。これ亦都河氏の力添へであらねばならぬ。

京都の縮緬屋さん事、大塚翁はこの書の内容に身を以て興味を澤山供給して呉られた人である。感謝の意を表する。若し大塚翁にしてこの行に加はられなかつたならば恐らくこの書の讀者に持つ魅力は半減せられたに違ひ無い。翁は實踐上から究明し出した人生の悟達者である。書中の記述によつて何人も翁に對し感嘆と愛好の念を生ぜぬものはあるま

い。翁の言行は翁の眞摯な人生哲學の發露である。若しこれをしも奇行とのみみて翁の美質を觀過する讀者あらばそれは筆者の本意でない。また筆者の記述力の足りなかつた罪である。累を大塚翁に及ぼしてはならぬ。

この機會に於て四ヶ月間、歐米山水の境に寢食を共にした右の外になつかしき世界一周會員、東京の上遠父子、伊東氏、神戸の新川氏、在米の都河辰夫君、ジャパン・ツーリストビユーロウ社の渡邊氏に敬意と感謝の意を表する。同じ會員の信濃の花岡氏が歸朝後一年にして長逝せられたのは遺憾至極であつた。

大正十三年三月

一平 生識





英領如奈陀バンクバー  
瀬戸守る家ニ手立良し



米國沙市  
ユニオン湖遊望



『世界一周』の繪手紙 目次

皆さん御機嫌よう!..... 一―三

お世辭のない世界一周記..... 四―三

一、紐育ペンシルヴェニアホテルにて..... 四―二

二、倫敦のホテルの小机より..... 三―九

三、加茂丸船室にて..... 二〇―三

かの子に與ふる『世界一周』の繪手紙..... 三―六

第一信より第二十信まで..... 三―六

『世界一周』の繪手紙..... 一―九

第二十一信より第二十六信まで..... 一―九

世界一周の對話..... 一―二

第二十七信より第三十一信まで..... 一―二

〇挿繪 三色版一葉 色刷百二十圖..... 一―二

目次終





皆さん御機嫌よう

皆さん御機嫌よう

縁あつて雑誌婦女界社主の都河さんと一しよに世界一周の旅に出かける事になつた。皆さん御機嫌よう！

間違の無い限り本月十八日横濱出帆のシルヴァリーステート號は其甲板に圖の如き二人の姿を載せて居る筈である。

都河さんは用意萬端整つて、その儘歐米の眞ん中へ抛り出しても恥かしからぬ紳士振りである。そして胸中燃ゆるが如き意気込みを持つて居るであらう。日本女性の爲めに、これは善い事である、参考になる事である、便利な事である、勧め



たい事である。警しめ度い事であると観たものは決して逃さぬ。必ず吸ひ取り搔き取つて「婦女界」を通して早速に、或は永い時間のうちに、皆さんの榮養となる筈である。その爲めに都河さんは大きな磁鐵や熊手を脊負つてる筈である。

僕の方も外觀は洋服を拵へたから堂堂たる紳士だ。然し乍ら内容は少々違つて居る。

僕は湯屋の歸りに世界一週に誘はれたやうなものである。持つてるものは手拭に石鹼、用意もなければ覺悟も無い。たゞ行く氣になつた迄である。善い事、参考になる事は必ず見逃して仕舞ふし、勸めたい事、警しめ度い事は始めから見付け兼ねる。

僕は都河さんが誘つて下すつたのを不思議に思つてゐる。他人は大概何か役に立たせる積りで有名の人を海外に送る。都河さんは僕などの點を見込んで大げさな旅行に誘ふのだらう。

僕の取柄は先づ悉く役に立たない人間である點である。折角、西洋へ行つて生活改善の視察も出來ねば、土木や橋の架け方も習へないし、健忘性だから洋食の喰べ方一つ満足には覺えて歸らぬだらう。繪と文を少しは物するが、是とても註文が出ては間に合ひ兼ねるといふ自儘の樂書故、矢張り役に立たぬとねばならぬ。この位完全に役に立たぬ人間も少からう。

この厄介ものが面白いものを見れば、誰遠慮なく笑ふ。辛ければ外聞も關はず澁面作る。出會つた

事柄、見聞した興味をあけすけに感じた儘に喋り散らしらく書する。

この頑是ない腕白太郎に勝手に自由畫と旅行記を書かせる。太郎は生れ付きお體裁や上手が遣へぬ性質、若し萬一、都河さんが僕を誘ふに取柄なるものがあるとしたら、こんな所ではあるまいか。それならば僕は湯屋歸りの一枚のど、てらさへも脱ぎ捨て、素つ裸の人間になつて丸き地球上の諸象を眞純な心に感得して來ねばならぬ。役に立たぬ人間が役立つ方法はこの一途より外にない。

お世辭の無い世界一週記！

成程これなら今迄に誰もやらなかつた。僕にもやれさうだ一つやつて見よう。



## お世辭の無い世界一周記

### 一、——紐育・ペンシルベニアホテルにて——

實に忙しき旅である。三月二十六日に亞米利加の陸影を見た。今日四月二十二日紐育に着いた。即ち二十五六日の間に米全土の大通りを荒筋駆け廻つて什舞つたやうな譯だ。泊つた主な市だけ並べても次の如くである。

シアトル、加奈陀のバンクバー、柔港、ロスアンゼルス、ソートレーキ、コロラドスプリング、パツファロー、ボストン、シカゴ、紐育である。

無目的、無希望の旅にも眼の前に活動のフィルムの如く來りては忽ち去る異境の珍らしき千態萬容は自づと予に矢立から筆を抽出さしめた、予の和綴の控帳は既に四冊を満たした。予は期待せざる獲物の餘り多きに驚き、これを如何に料理して予の讀者の玩味を容易にさせ得べきか、予は満足の微笑を湛へつゝも一方當惑の眉を頰めざるを得ぬのである。

斯くの如く豊富なる材料の載積に係らず、更に新奇なる材料を與へんとて、機會は予に活動を強ひ

た。例へば予は紐育へ着く、クック社の定規の市中見物以外に、予は予の未知の最良の人々に導かれて様々なる見聞をする。客自ら皿盤を持つて食物を流り歩くキャフェテリアの仕組み、白銅の投入れによつて自動的に食物を受取るオートマツトを試みた。

他の最良は紐育ウオールド新聞社に予を導き、この國の漫畫の大家に予を引合はせた。予はその新聞の爲めに稚拙なる日本毛筆を運ぶ暇に、彼は用箋紙を鋏で巧に切抜き、犬や象を拵へて見せた。

紐育の文士村の俱樂部で、蠟の涙の如く流れ落ち溜る蠟燭のほの暗き灯によつて、晚餐を攝つた。

隣の骸骨の壁畫のある小室にて、藝術家の男女達は何遍も何遍も同じ節奏を繰り返へす流行唄を、低く唱つて又高く嘯いた。

又、他の最良は、予を遠くヒラデルヒヤ、ワシントンに導き、自由の鐘のひび破れ、米國最初の國旗を作つた家、白亞館の大統領の住居振り、大統領の娘さんの招待會に招かるる多數の令嬢達が、花環を手にするを先頭にして、陸續繰り込み來る光景を見せた。ポトマツク河べりに異境の春に催されて、故國に居た時と同じ趣に咲く房重き八重櫻の並木を観た。可憐の姿に予は涙を垂れた。

かくて夜行汽車で紐育の部屋へ歸ると、夜半一時に垂んとして居た。

本日の午前九時にはセドリツク號に乗船、太平洋の浪を越して英國に向はねばならぬ。



只今即ち二十二日午前五時、予はペンシルベニヤホテル、千五百十番A室の書物卓ライティングテーブルに向つて居る。同室の老人小塚翁は、永生きをなさうな、間隔の長いいびきをかいてベッドの上で寝て居る。

小塚翁は京都の縮緬屋さんである。生來肉類を喰ひ洋服を着た経験の無い保守黨のおやぢさんである。予の覺束おぼつかなき英語を頼りに予に同室を求めた程、翁は全く外國語に不通である。この翁がエレベーターに乗つて自由に用を足して來て呉れるのは不思議である。どうするのかと聞いたら、思ふ階段の數を指を出してエレベーターのボーイに見せるのださうな。二階なら二本、五階なら五本。ところが予は通譯の椀鍋氏に川事あり、小塚翁に行つて呉れるやうに頼んだ。

『行つてさんじましょ、何階どす。』

小塚翁は容易こやすく引受けて呉れた。

『十二階の千二百八十一番です。』

といふと、

『そら、ねつからあきまへん。十階以上はわたしはよういきまへん。』

で、何故かと聞いたら、

『手の指は十本ほかおまへんやろ。』





といつた。

小塚さんには食堂へ出て食事の献立の注文にまごつかぬやう、注文カードを描いて渡してある。たとへば、小塚さんが牡蠣を食べたい時がある、その時は予が與へたカードを繰つて見る。カードの裏には牡蠣の繪が描いてある。カードの表にはオイスターと横文字で書いてある。小塚さん黙つてその表の方を給仕人に差出せば、

『イエース、オーライ』

と無事に運んで来て呉れるのである。

小塚さんの話を書いてるうちに、夜は明け放れて来た。烏や雀の聲もせぬ紐育の朝は、不風流だ。こゝは十五階の天上なれば、遙か下界に當つて高架線や自動車の軌る硬い音がする。

予の得た、豊富な世界一周記の材料は、今少し餘裕のある時間（恐らくセドリツク號船中にて）に徐に情趣の醗酵を待つて語り續けたい。今予は予が紐育到着後直ちに受取つた、予のなつかしき家郷の便りを語り度い熱情に充ちて居る。

あまりに私事に涉り過ぎるとの非難を許し給へ。これも世界を旅する人の偽なき心の吐露である。家人の便りによれば棧橋にて見送りの時の消息を次の如く叙して居る。



えりまきも、ハンカチーフも、手袋も一度にふつて呼びにけるかも

名も知らぬ男が吾子を肩にのせ、船なる父を呼ばせつゝあり

予の子供は予の船が去つてのち、すつかり憂鬱いふさになつたと報じて來て居る。それから横濱ステーション前で、家人達は見送りの青年達と洋食で遅い晝飯を済したと報じて來て居る。

又家人は印度洋の酷暑を注意し、予の體からださへ達者で歸れば、おみやげなんかはいつでもよいと、一面では無慾になつて、その事許り望んで居ますと書いて來てる。

子供はその父の留守なる故をもつて、望みを通して貰ひ、銀座通りで八十錢の白鼠を家の青年に買つて貰つたと報じて來て居る。

子供は牝メの方の鼠を何處で覺えたか『鼠の妻よ』など、呼ぶと報じて來て居る。その鼠はほんとに可愛らしい「真綿の一とかたまり程のもの」と家人は形容して居る。

予が去つて六七日目が家人に最も寂寥さびしの襲おそひ來る時らしい。尤もこれは特に主人が世界の旅に上つたといふ譯でなく、常の時の旅の留守にも同じ經驗をする事であると、彼女かのメは氣付いてる。

家の青年の手紙は予に安心さすべく、留守の者は總て元氣だといつて來てる。

それから出發後、子供の机の上に予のタキシードのネクタイが忘れあり、不自由なりしならんと問合せて來てる。

このネクタイの無い爲め、予は白ネクタイを墨で塗り黒めて遣つた、ウエーターに裏の白を見せぬやう、成るだけ後へ人の通らね方向ほうかうへ坐つた。

予のぶしやうを慮おもんばかつて「間着あひだきの背廣は霜降り許り着て居ないで、四五日交替位に取換へて着て下さい。また五月來頃ごもつきころになつたら、白セルのズボンを着ることも忘れない様に願ひます」と青年は書いて來てる。

すると家人は「細君のやうな手紙の書き振りを見てやつて下さい」と、手紙中に挿まげして來てる。



子供は漫畫を三枚の紙へ一ぱい描いて送つて來た。

シルヴァステート號にのつたおとうさんと標題みだしを振つて予が上衣うはぎを振り乍ら段々々小さくなつて行くところを、仕舞ひに豆のやうな大きさにまで、忠實に描いてある。説明には、

「小さくなつてもくふつてゐる、こつちでは洋服が海に落ちないかとひやく」と子供らしいユーモアを放つてゐる。

「ホークとナイフと間違へて西洋人に笑はれぬやうに御用心く」と

と説明して、予が左にナイフ、右にホークを持ち、食卓についでゐる繪を描いてある。そしてそれを見てる目鼻のついた太陽は笑つてゐる。

「一平の鼻が高い」と説明して、予の鼻がエツフェル塔と高さ競べをしてるところを描いて來てる。予の鼻の輪廓が鈍刀やがの歪ゆがみのやうに凸凹でこぼこしてゐる。

予はこれ等の愛すべき者等に對し、この曉ベン先に力を籠めて返事を書いた。

「兎に角、みんな丈夫で元氣で俺おれの歸るのを待つて居て呉れ。その爲めなら家に在る有り金みんな遣つてもいよ」と。

午前七時、時間だ。荷物を纏めて乗船に向はう。







旅人に取つては、耳の當りだけでも嬉しい。

で僕は洋袴のポケットに小銭を用意して置いて、三ペンスでもいい、四ペンスでもいい、ボーイの少年に遇ふ度にやる。すると少年が微笑し乍ら顎を心持ち引き、上眼づかひに謝意を表しつゝ、この

Thank you Sir

をやる。

『およしなさいよ、纏めておやんなさいよ』

同行の園藝家のK君が年若できまり悪がるが關はぬ。一々やる。

料理が具合がいゝ。米國の大皿で一皿多量主義はよして、佛蘭西式の日本には親しみのある、數多くの小皿少量主義となり、前菜からスープ、魚、肉、鳥、野菜、デザートといふ遣り方である。

陽氣は少々寒く、その上二三日船は揺れて一寸閉口したが、船を浪に任せ、行先を船に任せた海上の十日間は退屈しきつて、欠伸をして伸びをして、つまらぬ事を同行の連中と喋くつて許り居たが、その退屈が有難い。欠伸が有難い。伸びが有難い。駄辯が有難い。又陸へ上つて見物の旅に取りかゝつたら、とても退屈なぞして居る寸分の餘裕をも發見し得ない。

で船の中は退屈して、欠伸も種切れになつたが、決して原稿紙或は畫用紙に向はうとはしない。原

稿も書くといゝんだがなア、繪を描くといゝのだけれどと、充分思ひ乍ら、スモーキングルームの安樂椅子に身體をうづめてほかんとして居る。一生懸命勉強してほかんとして居る。

詩の女神は人がほかんとして、寧ろしばしば放心の形で居る、ひそかに魂の耳元に來て、彼女の心の奥底をさゝやくといふ事を、みなさんにご承知ですね。

僕の旅の印象、考察は、この時に自ら努めずしておもしろき詩の飾ひの絹飾ひにかゝつて、興味の肌質をこまかにする。

僕がほかんとして居る程度以上に、都河さんはベットの途中で随分よく寝た。そして時々起きて來ては、

『どうも、僕にはこの焼海苔が一番いゝよ。ファン、さつぱりして一番おいしい、ムシヤムシヤ。おや、まだ、あるよ、感心だね、ムシヤ〜。僕はもう無くなつちやつたかと思つたが、よく入つてゐるねえ、ムシヤ〜。ファン中々一ぱい入つてゐる、感心だ、と云つても、さう安心しては食べられないぞ。何しろ先が永い旅なのに、途中で仕入れるといふ譯に行かないのだから、貴重だねえ、ムシヤ〜、一つ無くならないうち、岡本君にもこの焼海苔を食べさせてやらう、岡本君は何處へ行つたらう、ムシヤ〜。』



都河君はよくひとりごとを言つては食べてる。海苔に向つて何か云ひ聞かしては、口の中へ運んでる。ひとりごとの中に觀察あり、注意あり、計畫あり、教訓あり、感化あるところが、都河氏らしい。

斯くて僕等は英吉利へ渡つた。

忙しき旅を更に始めた。中にも英吉利は歴史の國、落付いた國だけに、總てに影の深みがあり、分厚な奥行がある。英國へ一步入つて、改めて米國を顧み、何といつてもまだ新開地だなど嘆息される。そしてこの國の石炭の煙と霧の多い空氣が、意外にわれ等日本人の肺に適當してゐる事を發見した。煙と霧を混へるこの國の空氣には、主成分として多分のゼントルメンの作法、それはわが國の武士道の義理に、頗る似たるものが存在して居る爲であらうと推察する。

われ等を悦ばせたものは

リバープールで股引を穿いたやうな毛の生えた太い四足の馬

日本と同じく田舎の藁葺の屋根

案山子

古寺院の壁の蔦の緑

古いチエスター町を取圍む石の城壁

古城の庭の青草の羊

古塔の陰の林檎の花

牧場の青草の絨氈を貫く堀割の水とそれに

架けたる箱庭のやうな煉瓦の橋

柳の切株より芽を出す新枝

ステーションで小車を押してゐる兄妹の菓子賣

古寺院の名匠レノルズのス테인ドグラス。セキスピアの家

セキスピアが通つた彼の妻の娘時代居た家。オックスフォード大學の學生、女學生の破れた制服姿

オックスフォードの町中を羊群を追ひつゝ通る牧人

チームズ上流の河岸のボブラ。流れに白鳥

古寺院内の莊嚴な大學

その他數々ある。



これ等はいづれ、ゆつくり心構への成熟するを待つて、享けた詩味を分厘も損減せぬやうに、みなさんにお傳へしよう。

倫敦に三日午後三時過入つた。

こゝも一流の旅館といふセシル・ホテルに投宿。翌四日は午前漱石氏の作品で名高い倫敦塔見物、中の遊就館に木の香気な首切臺などが置いてある。午後ナショナル畫廊見物、西班牙名匠ベラスケスの世界的名畫『鏡の美神』等を親しく見物。

五日、即ち本日は午前この國の帝展である、ロイヤル・アカデミー展覽會を見物。午後はテムズ河地下のトンネル二哩を通つて、貧乏町を見學し、歸りは同じ河に架けた、汽船の通過の際二つに割れる「塔の橋」を通つて歸宿。再び自動車で、都俱樂部といふので日本以來の鰻めしを食べた。その味加減、鰻飯を持。且す白耳義生れの細君の肥り振り等も適當なる叙述を要するもの、一つである。後に落付いて細叙しよう。

俱樂部から歩いて歸り、それからこの申譯の文書き出して、只今は夜中の二時過ぎ、僕に割當てられた四七九番室の電燈の下に、ベッドの側近く小卓を引寄せ、左の肘をベッドの上の雪の如き敷布の上に更に置かれた、ばらの模様羽布團にもたせ書いてる。





ほつりく、口へつまみ込んでる小粒の黒いものは、田螺たじの佃煮である。仲間の一人の神戸の紳商が、水あたりをせぬ呪ひとて持参せる包より、半分僕に呉れたものである。

齒で噛みしめると、鹽からい醤油の味の間より、春の田を想出させる田螺の感じのよい泥の香がそこはかとなく薫する。何をおきてもなつかしきは、故郷ふるさとの風物である。僕の口の中に在る、この田螺の住家であつた田の畦には、柳の芽乃至あのなつかしき櫻もあつたらう。そしてそれ等は一きは咲き盛り、今は青葉の頃にもあるか、ふるさとよりこの地のクツク社へ託して僕に届いた家人よりのさきの手紙には、もう櫻はすつかり一重だけ咲きましたと前書きして、――

らんまんと櫻咲きけり日の本の

やよひの空の雲は動かす

と消息して来て居る。そしてその手紙の日附は三月三十日となつてゐる。僕は今年の櫻をこのなつかしき手紙の上に於てのみ見る。

時計は更に進み三時を廻つた。明日の見物の英氣を養ふ爲めに、これで擱筆して寝よう。

因に申上げて置く。僕の世界一周の寫生の控帳ついで帳は、もう六冊目も半なかば以上描き盡しました。



### 三、賀茂丸 室にて

六月十三日エジプト一週間の滞在を済ましてポートセイドより賀茂丸へ乗込んだ。

乗込むといふよりは寧ろ逃げ込んだ若しくは轉け込んだといふ方が適當かも知れない。それほどわれ等は旅に疲れて居た。それ程われ等は歸りの船を待ち焦れて居た。

船に落付くや先づ第一の仕事としてわれ等は二つの鼻の穴を出来る丈け大きくした。それから下唇を思ふさま前へ突き出した。亞米利加ヨウロッパ以來溜りに溜つた三月の間の吐息をフーツと大きく長く致した。

日本船ゆゑ誰に遠慮會釋もいらぬ。腹の底からの溜息！ 旅の疲れを癒すにこれに越した療法はまたとあらうか。これをもつて見てもわれ等外國を歩き廻つてる間は息一つ端に氣兼ねて碌々吐き切らずに居た心遣ひの程が察せられるであらう。洋行して見て初めて嫁入當座の女の氣苦勞が同情出来るやうな氣がする。

乗込みが晝過ぎ二時近くでもあつたので食堂は閉ぢて居た。ボーイ長が氣を利かして冷肉にパンを

添へてわれ等の部屋々々へ配らせた。色の小白い小柄のボーイが皿を運んで來た。それが日本人なのに先づ以てわれ等の眼は悦んだ。われ等は飽かずそれに見入つた。皿を置き乍らいつたボーイの言葉の、

『何もありませんが、どうかおあがりなすつて……』

といふ言葉を聽いて都河さんと僕とは儲ものでもしたやうに嬉しさうな顔を見合せた。

『岡本君、矢張り日本語は判りがよくつて愛想がいゝねえ』

『何もありませんがはい、こんな謙遜な口の利きかたを毛唐は夢にも知りませんねえ』

二人は感心して冷肉を頬ばつた。

空腹へもつて行つて一片の冷肉は瞬く間に吞まれ盡したが、感心だけはなほしばらくあとまで形を残して二人の話題となつた。

歸りの船に乗つたからといつて、あとまだ三十五日、一ト月餘の旅路である。乗込後四五日は三食ともにライスカレーを喰べられるのと、朝食に於て隔日になつかしきお味噌汁が喰べられるので賀茂丸を讚美した。味噌汁の外に佃煮、らつきよの漬物、福神漬の硝子壺が食卓上の西洋料理の薬味容れと並んでるのもわれ等の嘆美の的であつた。しかしあれ程欲して居た日本の米、日本のお茶も備へ



てある品はたか々四種五種の範圍である。どう喰べるにしたところで佃煮を先に喰つて、らつきよの漬物を次、喰つて、最後に福神漬をつまむか、これを逆にして福神漬を先に喰ひ佃煮を次に喰ひおしまひにらつきよを喰ふか兎に角その變化たるや僅なものである。なれて來ると不足を云ひ出した。

『何かもう少し違つた日本食を船で出してもよささうなものだね』

『船長が日本食を嫌ひなんだろ。それで出さないのかも知れない』

『さういへば船長は日本食が嫌ひさうな顔だよ』

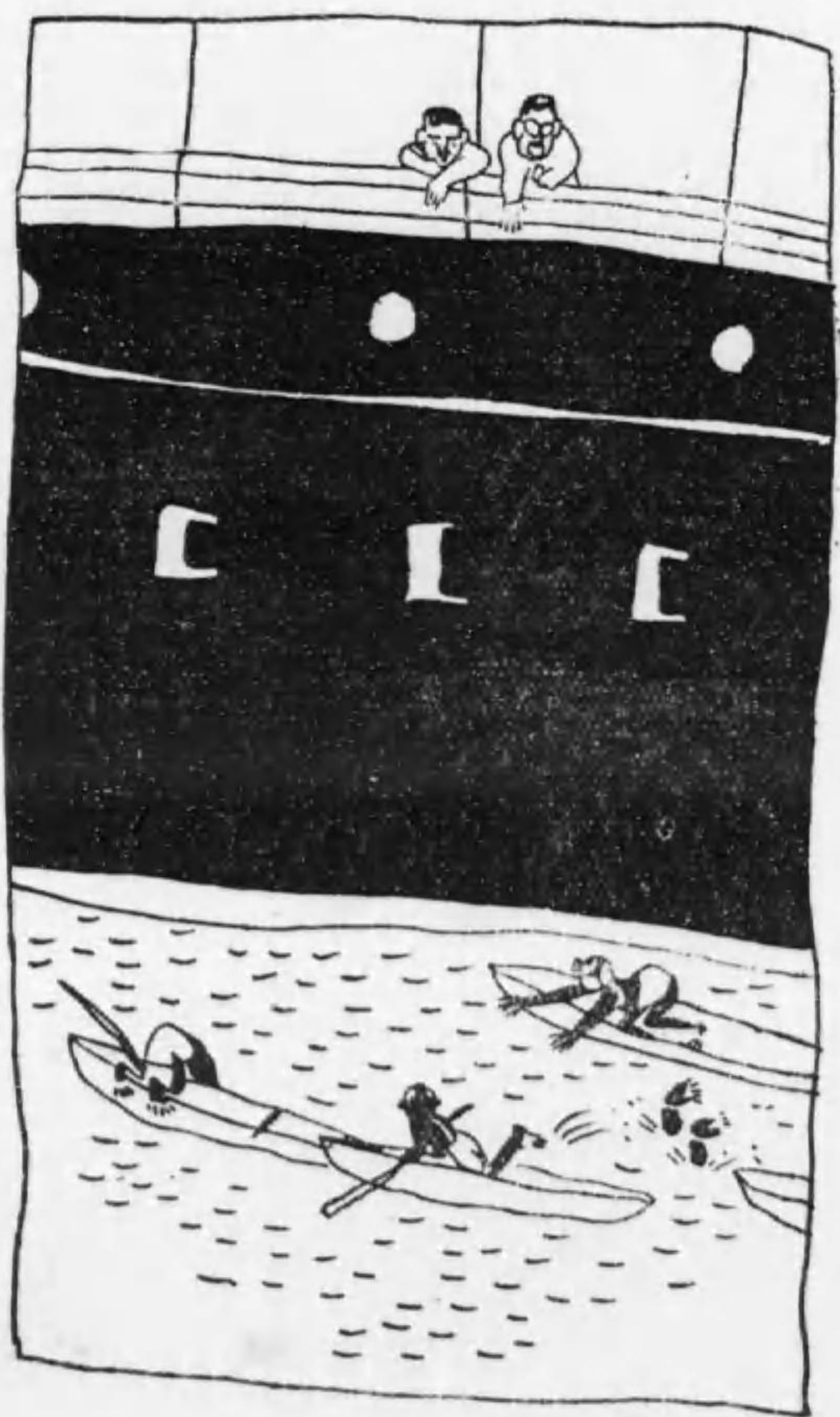
日本食の喰へぬ八つ當りは、船長の顔の品定めにとばかりを及ぼしたのは氣の毒である。紅海こうかいを通る時は熱かつた。終夜扇風機をかけ放しなので器械が焼け切れて廻らなくなつた。それでも寢つかれずに終夜悶々もんぐぐした。

印度洋へ出てからモンスーンが來て、後甲板へ怒濤を打ち上げる程の暴れ！

かくて十三日目にコロombo着。

コロombo見物の詳しく話は改めて後に書き綴らう。こゝで受取つた予に嬉しき便りは申す迄も無く予の留守宅よりの手紙である。

予の子供よりは例の無邪氣な漫畫入りで予の家の青年が徴兵検査を受け居る模様（青年は本年大學





を卒業したのでこの六日検査を受けたのであらう。出雲の國より知り合ひの青年が博覽會見物に予の家へ泊りがけで来て居る模様、その青年は肥つて二十貫近くもあるのを形容して「デブ公はまるで西郷さんそつくりだよ、犬をつれてこなかつたけど」と子供にしてはませた警句を放つて居る。その別行に「お父さん僕を忘れやしないだらうね」と書いてあるのを讀んで予は微笑を禁じ得なかつた。あの強情で人に弱味を見せるを死ぬよりも嫌ふ胸白が、これは又あまり女々しい怨言である。察するところ、こは彼の母の情緒的の性質をこよなきことに思ひ做して自づと享け容れし感化によるならんか、可笑し。

青年よりの手紙は例の如く留守宅の無事を事務的に報じ越し加へて「僕が餘りタイプライターを打つのでみんな笑つて困ります」と書いて来て居る。青年は卒業後就職口を得てその仕事の便宜に印字機を一臺買ひ求めたものと見ゆる。珍らしもの好きの年頃ではあり、彼はあまり印字機を濫用するので、周圍より笑はれるものと見ゆる。

勿論彼の手紙も處々誤字を加へたローマ綴りをその印字機によつて打つて来て居る。

家人よりはこの頃は中耳炎もすつかり癒り音楽と佛蘭西語の稽古にも行き出したと報じ越しして居る。して「有難う〜。ほんたうに親だつてこんな惜しけもなく仕込んでなんか呉れませんわ——わ



たくしをよく知るものは、のんびりしたところがわたくしにあると申します。おとうさんがのび／＼大切に下さるので気がひとりでのんびりとして居るところがあるのね」と感謝して来て居る。文中おとうさんとあるのは憚り乍ら予の事である。子供の予に對する呼び慣はしを取り、家人も予を常に爾呼び做すのである。なほ家人は三越で蘭の盆栽一鉢を買ひ求め、これを一平の居りし場所へお置き下され一緒にお仕事なし下され度し」と書き添へ、予の勤先の留守中の仕事場へ贈らせたのである。總てが平安と無邪氣と感謝に満ちた便りである。旅にこの報知を得て幸福を感じぬおとうさんは恐らく世にあるまいと思ふ。

予はこの手紙等を上衣のポケットへ入れ旅に飽きて心の渴く時ポケットの上より掌を當て、見て、手紙の厚味など觸つて見た。暖き潤ひが微笑と共に胸に湧き出た。

この時、これも予の家に居る青年の兄は入院中チブスで逝き、家人と弟の青年とは遺骨の壺を携へ逝けるものの故郷へ旅行して居つたのである。神ならぬ身とは真によく云つたものだ。

コロンボより新嘉坡へ六日の船路浪も靜になり船に驚かされて波上に群れ飛ぶ飛魚を今又二つ頓て三つ見付け數へて遊んで居た。午後三時半になると銅鑼が鳴つてボーイが紅茶に菓子運んで来る。船長も萬更日本趣味が嫌ひぢやないと見え、この頃は、時々おしるこが出る。牡丹餅が出る。牡丹餅

が一つ餘つた時は都河さんと抽籤にして、當つた方はこれ見よがしに見せびらかして喰ひ、當らぬ方は負惜しみを云つて罵倒し、すつかり子供になつて居た。

七月二日新嘉坡着。待ちに待つて受取つた手紙を見て予は冷たくなつた。

予の弟子のMより青年の兄の死を報じ越し來り、家人と青年は遺骨を携へて故郷へ向つたとの知らせである。

甚だ現金な話かも知れない。又、甚だ薄情な話かも知れない。然し予はその青年の死に就ては餘り心を亂さなかつた。生來弱々しく生れ、常人の抱く程の生の慾望、興味、自負をほとんど缺いて居た青年の兄は、彼に與へられた順境の進路を辿つて行くにさへも随分骨が折れるらしく見えた。たゞ生きる事さへ可なり負擔のやうに見える運命に生みづけられた弱い心身の人であつた。與へられた彼に對するこの度の運命の所置については、予は黙つて合掌する。合掌して任せるべきものに任せ奉る。

予の恐怖は青年の兄の死因が傳染性のチブスから來た事である。さういふ用心にかけては迂濶千萬な予の家の他の者が若し傳染したらどうしよう。満足して印字機を打つてる青年に、予の土産の油繪の具の道具を待つ子供に、予に感謝して勉強してる家人に。

恥を言はねば理が通らぬから申す。予が今日いくらかでも人生に愛のある事、信仰のある事、藝術



は眞面目な事、生活に張合ひのある事等を認めさせたのは家人のお蔭である。その前は予は箸にも棒にもかゝらぬ否定主義の無頼漢であつた。酒は浴びる程飲んだ。家人に糧を與へず、己れ獨り刹那の享樂を獵り歩いた。家人は荒野の如き臺所に子供と向き合ひ、三日も碌々物も喰はず黙つて涙を垂れて居た事もあつた。物質上の酷虐を與へたのみか、予は彼女の最も厭ふ方法にて彼女に精神上の打撃をも與へた。因果は理法通り來る。彼女はほとんど三年餘も神経を破壊されて居た。彼女は彼女の總てを暫時犠牲に供した。それから幾多の難行苦行を経て、兎に角予を明みの方向へ向はせて呉れた。

實を云へば彼女のこの位の感謝の手紙で、のほ、んと彼女を幸福にした積りで、飛魚の勘定なぞしてられる義理ではないのだ、予の過去の經歷は。そこが人間の横着で、忘れつほいところ、今予は慈恩深き保護者のやうな高慢な氣になりかけて居た。

然し、然し、若し萬一チブスが傳染つて（こんな事いふのも嫌だが）彼女がこの世に無いものとなつたら予はどうしよう。その時、予は何としても執る方法を見出し兼ねる。

こんな不安を抱くのも旅の疲れの神経衰弱のせるかも知れぬ。

七月三日新嘉坡發、同七日香港着。

香港にて何かの便りを得て安心したいと思つて、手紙を持つて來るクツク社の案内人の姿を見るや







一番先に駆けつけた。予に宛て、は友達よりの他来てない。かうなつたら香港の見物も糞もあつたものぢやない。予はひたすら心配を始めた。一生懸命心配して、正直に神経衰弱になつてるのがせめてもの彼女への償ひだ。

七月十日香港發

上海まで三日の船路。十三日の朝から海がそろ／＼濁り始めた。楊子江が河の泥を海へ吐き出す爲めだ。晝頃兩岸さへ確と見渡せぬ廣い／＼楊子江の河口へ入つた。泥はいよいよ酷い。壁土を溶いたやう、これにつけても予は想ふ、濁るなら勝手に濁れ。然しどうかして予の家人達は丈夫で居て欲しい。

この間の懊惱は又改めて書く。

仕方ないからもし彼女が死んだら、子供が一人前になるまで面倒見て、それから予は出家して僧とならうと決心した。徹底して彼女の行先の行先、それは生を更へ死を更へようともその行先は彼女を安泰にまで送り届けねば置くものか。

彼女が予を不必要とする程絶對の安泰に獨りで居る事が出来るまで。

彼女の予に與へた數年の犠牲は予をかく決心せしむる程強い因縁を予に植ゑつけてあるのを發見し



て、今更に驚いた。

一方を断てば一方絶ゆるといふ双生児といふものゝ事も胸に絶えず聯想された。

七月十三日上海着。

有難くも家よりの手紙があつた。

青年は、兄の死の愁ひより少し遠ざかつたと報じ越して居る。

子供は家人の叙述によれば、

これがそもわが生みし子わが子かや

泣きわめく子をつくぐと見る

これがそもわが生める子かわが子かや

あまり可愛ゆしつくぐと見る

先づは無事で祝着だ。

家人は青年の兄の死に就て左の如く歌つてる。

これがそも人のはてかやかろくに

骨壺を抱きかい撫でかい撫で

骨壺を抱きてしばし眼を閉ぢぬ

また眼を開けば陽はかゝやけり

それはさうとして扱家人自身の心持ちはどうであらうか。

かがやける陽よ咲く花よ夫よ子よ

われ死ぬべしやいかで死ぬべしや

われ死なばもろともに死ねよ咲く花よ

かがやける陽よ夫よわが子よ

人として命終らばうつし世に

鳥とも魚ともなりてし生きん

予は之を見て直ぐに安心する程呑氣では無い。予は先づその手紙の發信日附を取調べてかゝるだけの世故を経て來て居る。日附は一通のは六月廿六日、一通のは同廿九日、そして今この便りを書いてるのは七月十七日午前五時である。明十八日神戸へ着いて、そこに迎へに來てれば初めて彼等は安穩なのだ。



即ち廿八日發信以來以後今日まで約十七八日の間彼等は健康を續けて居るだらうか。續けて居て欲しい、續けて居て欲しい。

愛は心配である。冒險である。根氣である。事業である。そして信仰である。

予は世界一周の本文の記事を書く前に二つ三つ讀者諸氏に寸信を差上げた事は御承知と思ふ。然しよく考へると、そのどれもが家人を中心にした事に就てのみ申上げて居る。實際予は家人の事を考へてのみ世界を一周して仕舞つた。笑ひ給ふな。われ等は結婚してからも早十年餘の歳月を経て居る。なまなかな色や戀で、こんな今時珍らしい馬鹿正直な心持が續けられるものでない。因縁だ。因縁愛だ。

で、本文の便りを書き出すにしてもやつぱしこれがついて廻る事だらうと豫想される。然らばいつそ家人の名に宛て、予の世界一周の繪手紙を描く事にしたらどうだらう。一人に對して完全に語る事は、萬人に對して完全に語る事である。萬人に粗略に語つてはその中の一人だも完全に肯ふものではない。

賀茂丸の予等の住居の十五號船室の向う側のベッドに豚翁が眼を覺し、仰向けの儘本の頁を繰つて居る。今は朝の五時半、夜はほのほのと開け放れ、薄鼠の九州博多沖大島が船尾に走り去り、黒い小

い鳥が船首右舷に近寄つて來た。豚翁はさつき小便に起きた序に隣室を覗いて、一周會員中の老建築家の息子が、近き上陸の日を慮り、その濃い長い髪の毛に癖がつかぬやう、手拭で縛つて居るのを見付け出して予に聲をかけた。

『豚平君！ 豚平君！ 隣の息子が冠冠りをして寝て居るよ、早く見給へ〜』

それから豚翁はベッドへもぐり込んだといふ段取だ。

豚翁とは初耳ゆる御承知あるまい。實は都河氏の事だ。ベッドの天井が低いから頭を先に枕へ宛が

ひ、

『やつこらしよ』

と肥つた尻をごろりと納める。そしてよく寝る。一寸豚の趣が無いでも無い。故に敬稱して豚翁。するとその反對の側に陣取つた予も肥つて寝好きだ。そこで豚翁が予を敬稱して豚平。退屈するとお互に、

『全く近頃のわれ〜は豚だね』

『豚が二疋だ〜』

とかういつて笑ひ合ふ。



一言添へる。賀茂丸の船室の中では、かう豚二正だが、傾てこれが陸へ上ると何れも相當に權威を保つ紳士で無くてはならぬ。この呼名は船中以外御使用お断りに願ひ度い。

豚翁は予の一周記表題、改名の相談をかけた。

『それはいゝねえ』

と早速承諾して呉れた。この三四ヶ月婦女界編輯局の一部が世界一周してゐるのだから、

いつでも相談が打て、話が早い。

扱この次は家人に訊いて見る。もし彼女が承知したら、いよくその表題で本文を書き出す事にす

## かの子に與ふる世界一周の繪手紙

### ◎第一 信

いつも家での相談では洋行するならば家中一しよにしよう。する時期は一人の子供が只今小學尋常科に在學ゆゑそれが終へた時、中學へ移る間の一二年を休業さして連れて行かう。かういふ約束だつたね。

一たい俺の家の組織は、人間としての生き方を研究する爲めに寄り合ひ合宿所のやうなもの、も少し詩的な言ひ方をすれば愛の丸火鉢の周圍へ自づと寄り合ひ、八つ手のやうな大きな手、楓葉の芽のやうな小さい手を隣り合はせ並ばせながら藝術の灯に見護られつつ苦澁な人生の冬の夜永を暖く語り明かさうといふ寒さ嫌ひの夜伽會だつたね。

十二の子供一人でも立派に愛の講中の一員である。彼はおやぢの大事な紙をソツと持ち出す。他愛もなき樂書を紙からはみ出し疊の上にまで塗り擴める。その儘遣ひかけの繪の具と筆を書齋の中央へ抛り出し、遊びに出て行つて仕舞ふ。そのだらしなさ、いけなさ。つくづくさくさくする。子供といふ



奴は丸でおやぢの事業を破壊する爲に生れて来たやうなものと落膽する下から、湧然と愛が湧き上つて来る不思議さ。俺はいつかわが心の不思議さをヂツと凝視して居るのである。

外所へ出て行つた子供は路次の角で隣り近所の腕白共を寄せ集め、もう銀行屋ゴツコを始めてるらしい。

『松ちゃん、お前に一億圓のお紙幣遣るから先の百圓紙幣返せ。』

かういつてる聲が聞える。

俺は思はず笑つた。そして其一億圓の紙幣なる物が如何に大いか見度くなつた。で、描かけの繪刷毛を差置いて二階の縁側へ出てみた。

檜葉の葉の隙より覗ふと新聞紙を三角に折つて冠つた帽子と久留米飛白の肩だけが僕に眺められたが、その持つてる小さい手も顔も見えなんだ。檜葉の青葉には今ヅン・ゴツホの繪のやうな日光が射かけて縁に燃えてる。隙が痛くなつたから眼を瞑り書齋へ引込んだけれど、心に深く射込んだ光の生氣はいつまでもいつまでも俺を新鮮にした。

繪の具を取散らし紙を浪費する子供でさへ此の様な愛の重大な仕事を擔つて居るのだ、況んやおまへに置いてをやらう。家の中の誰一人を残し置いても愛の株式會社は破産である。俺は俺の廻りに悪

戯でもよい叱り聲でもいゝ、兎に角、親しきものが動いて呉れないと落付いて仕事に向へぬ性質だ。

一人で歐洲留學などとは思ひも寄らぬ。その上おまへはおまへで専門の藝術を持つて居り、西洋の思潮に觸れて来る事は俺以上おまへに必要な事かも知れぬ。で、行くならばそつくり株主残らず洋行と定めて置いて、扱旅費の問題だが、これが中々の難問題だ。

年頃溜めるとなしに溜まつた金も有る事は有る。したがこれは病氣や不時の物要り——いくらか生活が樂になつた此二三年より前には、その爲におまへがどの位心身を壞つたか、どの位持つてるものを無くなしたか、お前の今も悩むいろくの病ひはほとんどその當時の生活難及び俺の思ひ遣りの無かつたことから來て居る。俺は誠實になりかけてから沁々と思ひ當つた事だが、その當時、自分一人いゝ目を見ようとした俺の頼もしくない根性にも呆れるが、打つかつて來る難儀を悉く正面に引受け、蒙る矢、血だらけになつても泣きながら、ぢつとして居たおまへの利口で無い性分にも呆れるよ——に是非取つて置かなくてはならぬ金だ。

俺の友達の家等が巴里へ留學する爲め旅費を準備する。大概往復を加へて一年の留學にどう儉約して見ても六千圓は要るさうだ。それを集める爲めに畫會をやる。一枚を五十圓か百圓の定めにしてその金を前に受取り、繪はあちらで描いたものを頒つといふ仕組だ。百圓の繪にしても六十枚描かな



ければならぬ。一人洋行するにすら凡そこれ位要るのに、俺の家では四人だから大變だ。行く事は子供が尋常卒業の時と略見當をつけて見たもの、旅費の方で危ぶまれた。然しこゝ二年間に神若し恵み給はゞ自づと何とかなるであらう。氣持ちといふものは存外、宛になるものだ。屹度何とかなるだらうといふ氣持に俺達は可成り信用を置いてたね。

二年先に！ 二年先に！

外國の地を踏むのは少くともそれより早くは機會が見舞はぬと家中のもの、腹の中で價踏み定め居る筈だつたね。

ところが、急に俺だけ先に外國の地を踏むやうになつたのは家中の意外だつた。

◎ 第 二 信

本月一月の初め頃だつたと思ふ。

俺は勤先きの畫室でせつせと仕事の繪を描いて居た。珍らしく婦女界社の都河氏が訪ねて來られた。三階の應接間で對談した。話は直に俺に世界一周の勸誘であつた。今度都河氏が行くに就て、







『丁度よいお伴れだと思ひましてお誘ひ致しました——』  
可成り大規模の計畫であるべきものを、苦も無く軽く話すところ、如何にも大世帯を擔つてゐるらしい。

正直に云へば僕はかねて昔程では無いと云ひ條、人があまりに多く洋行したが、世間があまりに持て囃すを片腹痛く思つたところの一人である。ところが今洋行、而も世界一周の相談を容易く打かけられ、俺の心は一も二も無く弾んだのはどうしたものだらう。狂言言葉で、これは如何な事、といふのがこの場に一番適當の評語だ。

『そいつは——』有難いと云ひかけて淺ましい氣がしたから、  
『結構な御相談ですな』  
とわざと言葉の熱度を下げた。

俺が言葉の熱度を下げた理由は、たゞ淺ましいと思つた許りではなかつた。他にまだ二つの大きな原因があつた。その一つは俺の勤先の氣兼ねである。もう一つは云はずと知れたおまへの意見を訊かぬ前だからだ。

俺は自分が誠實に向ひ出してから、そしてまだ自分自身確かりした人世の生き方を發見出來ぬ前、



俺はおまへに對して淺ましき仕打ちによつて作つた俺の罪、それをどう償つたらいいか随分考へた。そしてこれから先は總ておまへの爲めに生きてやらう。この方法が一番おまへの幸福を取戻すに有力らしきを考へ當て、その決心をおまへに打明けた事もおまへは確に覺えて居るね。

それ以來、俺は人生觀に於ては興味も張合ひも持たぬ全くの懷疑主義者であり乍ら、おまへの誠意に背かぬ動き方だけはして來たね。俺はその爲め、宗教の巡禮もやつた。道樂も、酒も、煙草もやめた——たゞ、寢坊好きと食辛抱だけはどうしても廢せなかつたが——半僧半俗のやうな生活をして來たね。この度びとても右の決心ある以上、おまへの心持ちを疎外してどんな相談も纏められるものぢやない。

『よく御相談下さつて——』

都河氏が歸つた後、俺は默想し乍ら畫室へ戻つた。そして無理に念を入れて描きかけの繪の線を引き續けた。心を叱つて云ふには、この相談、纏らぬと見て置く方が後の落膽の苦しみを嘗めなくてよいぞ。兎も角も落付く事だ落付く事だ。

いつもの時間通りに家に歸つた。家中は食卓の周圍に坐つて俺の着席を待ち兼ねて居る。洋服をかながらり捨て和服に着更へ俺は座蒲團へ坐つた。例の通り互に温味を取り交はす輕き冗談の二つ三つ、

子供に對しては愛撫の掌の代りになる無邪氣な擲揄の一句半句、子供はおやぢに對し一日中溜めて置いた甘たれかけの鼻聲を切り出すべくこの機會を待つて居た。小さな箸を投げ捨て武者振りついて來る奴を程よく引離し、再び元の座席へ坐らせた。

俺は落付きをなほ繼續さすべく徐ろに箸を執り上げ、靜かに食卓の上を點檢した。今夜のお菜は、か鍋である。

俺の家に居る青年の郷里の出雲の國——それは冬は日本海から吹きつける暗く荒き風雪に閉ぢ籠められ勝ちの土地だ——で行はれる料理法である。黒く大きい古朴な鑄物の鍋、それに時の野菜を數多く挟み入れる。鯛、甘鯛、鱒のやうな鮮けき魚を、骨ごとブツ切りにして中へ加へる。砂糖と醬油で鹽梅よく煮ながら熱きを吹きもて食ふ、至極簡単な喰べ方である。野菜を芥かなんぞのやうに惜し氣も無く摺み入れ、魚肉を豆腐のやうにふんだんに喰べる。その雄大な趣きが嬉しいので家ではよくやる。

『今夜のへかは何だい』

『鯛なのですよ。少し淡泊し過ぎると思ひましたけれど、生きてたものですから。』

『おとうさん、鯛生きてたよ。魚屋がね、庖丁でね、頭擲つたら死んぢやつた。』



青年は撃劍四級の太い腕を出して、それでも忠實やかに、骨を撈る事の下手なおまへと子供へ向く鍋の側には骨の少い尻尾の肉を、俺には脂肪の多い腹の肉を、野菜の土手を押し分けて入れて呉れた。そして自分の方へはあんと大口開けて無念の齒を嚙み出してる鮪の頭を突つき込んだ。

この青年は家に無くて適はぬ心遣ひをして呉れる人だ。おまへの性質はこの役には落第だね。二口三口喰べてから、俺は時分はよしと何氣なく言つた。

『今日世界一周に行つて見ないかといふ話があつたんだがね。』

だがねと軽く話を掠らしたところに俺の遠慮がある。言葉遣はだがねだが、俺の注意深き眼はおまへの返事の出方を生死の境と刺す様におまへの顔に注ぐ。『まあ、それは、いゝお話ぢやないの。でも、もつと詳しい話を聴かして——』

おまへは案外、虚心で受けた。その證據にはその後ですぐ氣を傍へ外らして、

『Yさん、あなた、骨の頭とこ許りしやぶつてやしなくつて、ちつとは、良い身のところもお喰りなさいよ。遠慮らしい。あなたがさうだとあたし達だつて喰べたものが實になりやしなくつてよ』

叱られた青年は氣まり悪さうに口中より嵩ばつた、大きな鮪の頭を引出し改めて良い魚の肉と代へた。

俺は都河氏來訪から誘ひかけられたこの旅行の筋書まで詳しく話した。

『さうね。では行つてらつしやい、行つてもいゝわ。』でも、お前は俺の旅行中の事を心配して又例の病氣にでもなりやしないかい。』

『大丈夫よ、あたしは此頃はすつかりあなたを信用して居ます。末梢の心配はするかも知れませんが、根本は大丈夫なの。行く方があなたの爲にいゝ氣がするわ。あたし達の行く時の参考の爲にもよく見て来て頂戴』

これで解決した。俺の心は筋斗でも打ちたいやうだつた。それをぢつと堪へた。俺は口に突き出る感謝の念を男子の體面をもつて押へつけて仕舞ひ、鷹揚に左の如く言つたね。『おまへも此頃は本當に料簡が廣くなつたものだな。』

聞き耳を立て、一部始終の様子を聞き知つた子供は、早速鼻聲を立てた。

『あら——お父さん洋行するの。一人で絞いや僕も連れてつて——』

箸と茶碗を投げ捨てるや俺の頸玉へ獅嚙み付いた。俺の頸玉は度々この目に遇ふので赤き蚯蚓脹れが断えない。



◎第三信

勤め先の首尾も上々吉であつた。彼は藝術家の自由を尊重して呉れた。大會社の襟度を以て快く四ヶ月間の暇を呉れた。俺はこの好意に對し都河氏の了解を得て世界一周中集めた研究資料のうちその方向へ向くものあらば機敏に書き送り、それによつて感謝の意を表さうと豫め心に決めた。

承諾を得べき筈の承諾は既に得た。俺はこの報告を齎して都河氏に逢はねばならぬ。

電話で約束しといたある晴れた日の午前、俺は市ヶ谷見附で電車を降り、道を訪ね、婦女界社を加賀町に探し當てた。俺は五年餘も雑誌に繪を載せては居るが、その社を訪ねるのは今日が始めて、少からず動く好奇心が俺の觀察に力を入れさせた。

場所も雑誌社があるやうに思はれぬ細い閑かな横町の奥。建物の様子も雑誌社らしくない、表を板塀で圍んだ普通住宅の建方のが二棟。俺は早春の陽の暖くあたつて居る二つの門口のどつちへ入らうかと、迷子程でも無き躊躇を一寸した。都河氏の門札のある戸口の方から入つた。次の格子戸があるのを開けて入つて聲をかけた。玄關の土間には大小數多くの下駄が並んで居た。中にも一と周圍りぐらるづつしか大きな違はぬ子供の下駄が先生から、「番號!」の號令を待つやうに脊の順に温順しく







並んで居るのは俺をして思はず微笑させた。始めて訪ねる家に對して氣構へする訪問者の硬くなる心それが幾分薄らいだ。

出て來た女中が俺を導いて行つたのは他の棟の建物であつた。

女中より俺を受取り迎へたのは洋服を着た、まめらしい若い雑誌記者であつた。その記者は俺の爲に一番奥の瓦斯ストーブの前へ椅子を近づけストーブに火を點けて呉れた。

俺は瓦斯の火に焙り乍ら婦人雑誌の編輯室といふものを物珍らしく見廻した。

長方形の可成り広い部屋である。二面は硝子戸を嵌めて光線の入りを好くしてある。硝子戸を透して園ひの外に見上ぐる許りなる建てかけの建築がまだ壁で包み切れぬ心棒の鐵材を鬼の角のやうに空へ突き出してる。それへ冬の午前の日が當つて片側の陰は救ふべからざる意地悪るさうな煙脂色。眺めても味氣ない感じを起させる乾いた尖々しい建築は恐らく工場用のものであらう。眼を反へして室内を見る。

可成り広い室ではあるが數へ切れぬ程の机と椅子を置き並べ通り道も無いから。古い机から中古の机、それから眞新らしきものはニスの照りまだ飴のやうに光つて居る。これは擴張に擴張を重ねてこゝまで發達した編輯室なる事が判る。それにつけて連想するのは此社で發刊す雑誌の編輯振りであ



る。第一頁より最終の頁まで盛り切れぬ材料を山のやうに盛つてある。その爲め可成り金をかけたらうと思ふ記事も六號活字で目立たなく隅に押込んで。手に載せると重いやうな氣がする雑誌だ。それは荷物を満載した引越車のやうな豊かさや親しみと通俗さと愛嬌とを持つて居た。

置き並べ切れぬ机と椅子に當惑してゐる編輯室より、盛り切れぬ材料を抱へ閉口してゐる雑誌が生まれる。俺は此合理的な光景に満足した。

何に使ふものとも、又俺達のやうな面倒臭がり屋には使ひ切れさうもない、いろ／＼のハイカラの器具が置いてある。恐らく一度は雑誌上で諸者の家庭にその便利さを紹介され、しかも俺達は頭から別な世界のものとして讀まずに頁を繰つて仕舞つたところの利器でそれ等はあるのだらう。妙な形の把手（て）がついたり、金屬板に彫り込まれた洋字の凹凸が光線を反射してたりした。

室の中央に大きな煖爐、それにも増して大ききやうな煙突がいくつにも室の空間を屈折させられ、駄々を捏ねてる。宥め賺（な）されてやつと壁から外へ抜けてる。煙突の導き工合も科學的又經濟的により多く室内を暖め得られるやう工夫を籠めたところ、如何にも常に家庭の相談相手になる雑誌の編輯室らしくある。

少し疲れて傍のデスクに肘（つ）をもたせかけた。そのデスクは質素な飾がついて、外の机と違つてゐる。多分主幹のだらう。よく見るとデスクの面に貼つてある羅紗が随分汚れ破れかゝつてゐる所もある。このつまらぬ事も初訪問者の筋張つた心を和ら（や）けるよすがになつた。

都河氏が出て來た。普通肥つた人はその太鼓腹の下へ兵兒帶を締め下けるものだが、この人は胸の方へたくし上げ、腹はその下に膨（ふ）れてゐる。大きな坊ちゃんやうだ。身體をうしろに反り返へし、身體に似合はぬ短かい手をこまかく振つて歩く調子を取る。

漫畫に描けは河豚（かぶ）の泳いでゐる所かペンギン鳥だらう。

『お待たせ致しました。お話しするにはこちらの方がよろしうございます。』

都河氏は應接室に導いて自分でストーブの瓦斯（お）を捻（ひ）つた。

用談を仕舞つた。

『あなたは身體は大丈夫ですか。』

都河氏が訊いた。

『昨年、腎臓をやりましたが今は丈夫です。』

俺が答へた。

それから可成り永い間雑誌編輯上の考へや嘗て洋行した人々の噂やに就て話に花が咲いた。有名な



Rといふ小説家夫妻が世界一周をして来た紀行の本の話も出た。俺は、

『R氏はべらぼうなところがあるから私は大の最員です。あの人は随分芝居氣があるやうですが、少しもそれを自覺せず、平氣でやつて行くから厭味になりませんね。』  
俺はこんな評をした。

話の中に編輯古參の二人が紹介された。

千葉君は一二度遇つた事のある人。駄洒落の名人と聞いたが、今日は濟して居た。霞の中にあるよ  
うな彼の顔は謹しみを加へて一層長閑さを増した。

いつ晝になつたか、制服を着た少年が鰻飯を運んで来た。山の手の事だから碌な鰻はあるまいとた  
かを括つたが思の外上等だつた。

喰ひ終つて都河氏は自分の喰べた箸をボキンと二つに折つて捨てた。これも二度使はぬしるしにか  
うするがいと「婦人の心得」の中にあるのだらう。

都河氏の長男の青年が丁度中學を卒業したので留學の爲め紐育まで一行に加はるとの話もこの時間  
いた。





#### ◎ 第 四 信

俗事に悟りの悪いおまへは、俺が歸朝した今もつてなほ、今度の旅行の仕組や費用やについて随分とんちんかんな記憶を持つてるやうだよ。で、念の爲め一應簡單に説明してやらう。

トーマス・クック社といふのは英國に本店があり、世界中到る處に支店や代理店がある、そして旅行の萬般の事を取扱つてる。世界中どこへでもこの社の手にかゝつて旅行出来ぬ土地は無い機關と勢力を持つてる。先頃攝政宮殿下が渡歐遊ばされた時もクック社が御世話申上げた。

この社が世界一周の團體を募集した。日本ではこの企が二回目なさうだ。旅行の月日は丸四ヶ月かゝつて廻る國々は英、米、佛、獨、白、伊それに都合出来れば埃及へ入り無論海峽植民地も通る。往きは太平洋を渡つて米より始め、歸りは印度を越す歐洲航路に依る。會費は八千五百圓。總て一等待遇にして汽車、汽船、ホテルの費用、食事、見物、案内の費用、ボーイの心付まですつかり會費に入つてる。旅行者は洗濯代と自分の飲もの代及び土産物等を買ふ小遣ひがあればいい。然し兎にも角にも世界一周の小遣だ。旅に路銀の手薄な位心細い事は無い。夫に支度金も相應に要る。何のかんのと少くとも一萬二三千以下では決行出来ぬ代ものだ。



行く先で目録通り世話役に土地の案内者を加へ、洋行する程の者の見物するところは残る隈なく見物させる。それによいのは日本から日本人の通譯が一人ついて行つて呉れる事だ。果してこの待遇通りとすれば赤毛布は赤毛布でも大名の赤毛布、紳士の赤毛布といふものだ。

◎第五信

支度をしよう／＼と思ひながら、つひ例の癖で一日々々と延びて仕舞ふ。かういふ場合には普通おまへが督促係になるべきを、おまへも呑氣だ。植木屋から澤山、やくざな植木を買つて来て、これを植ゑ度いのだが、相談に乗つて呉れないかといふ。そんな暇は無いと怒鳴つたが『でも、あなたの好きな山椒の木も買つて来たのになア』と寂しい顔をしてるのが、二階の欄干から、覗くと見える。氣の毒に思ひ、不服な心を足で二階から、梯子段にやけに當り散らし乍ら降りて行つて手傳つてやる。なんだ、山椒の木だなんて言つたつて、貧弱なものだ。それでも眼を近く寄せて観ると木肌に山椒らしい斑點があり、こまつちやくれた棘も出てる。僅に緑を吹いたマツチの尖の葉ほどの芽を、爪で缺いて鼻の先へ持つて行くと矢つ張り山椒の香だ。おまへの鼻の先へも持つてやる。

『あたしは鼻が悪いからさうされたつて鼻の先が擦つただけよ。香ひはしませんよ』

『さうだつたな。残念だな。俺はこの謙遜で滋味のある香が大好きだ。今に芽が出たら煮て食ふんだな。』

『さうですとも、澤山お喰んなさいとも、あなたには他に道樂は無し、せめて好きな喰ものぐらゐる澤山お喰んなさいとも。』

俺はこの言葉を感謝の念を持つて押し頂く前に、失禮ながら笑つちやつた。

この幾葉出るか判らぬ瘦せこけて貧弱な山椒に向つて、澤山お喰んなさいともは、思ひ切つてよく言つた。山椒が聞いたら苦笑するだらう。

俺の笑つたのに氣付いて、おまへも大いに笑つて仕舞つたね。

でも、山椒は合議の上、臺所の通路の片側塵芥箱の傍に植ゑたね。植ゑた後眺めると塵芥箱の時代を経た黒色と、山椒の錆びた枝振りとの配置に、平俗な詩味が現れたのは儲けものだつた。

本尊様がこんな具合だから、一番氣を揉むのは家の青年Yだつた。

『おとうさん仕様がないな。』

かう嘆息しつゝ、一人でさつさと支度を纏めて呉れた。何時の間にか洋服屋を呼び寄せ、靴屋を呼び寄せ、俺を捉へて、のつ引きならず寸法を計らせた。



『洋服屋がね、西洋では寢巻にかういふのを着るんだつて。序に持つて來ましたから買つときました。試験に着て御覽なさい。』

ネルのやうなもので、頭から冠る寛闊な一枚服だ。着て見るとゲツセマネの園で、天父に禱る基督の姿のやうだ。

『はい、こりやあ神々しくつていゝ、どれ一つ寢具合を見てやらう。』

『おとうさん、そんな事をしちやあ、あなた寢坊だからすぐ寢ちまいますよ、そら、駄目ですよ、起きませんかよ、風邪をひきますよ』

Y青年の聲として、

『だらしが無いなア、洋行する人とは思へやしない——』

といふ聲までは耳に入つたが——その次に、

『やい、起きろツ、御飯だよツ！』

と頸つ玉へ嚙りついた子供と共に跳ね起きて見ると、身體に搔卷がかゝつて居る。電燈に灯が來て居る。扉を越した隣の家の茶の間で夕餉の箸を茶碗へカチ當てる音が聞える。

庭の山茶花に夕霧がたゞよつて居た。







もう一枚、焦茶の甲斐絹で出来てる、支那服のやうな室内着の試し着は、おぢやんになつて仕舞つた。そして家中の攻撃を受け乍ら、すこく俺は食卓に向つた。

### ◎第六信

『これだけは、どうしても一しよに行つて下さらなきや、見當が付きませんから。』とY青年に云はれ、三越へ買ものに出かけた。

然し連れて行つたつて、結局俺は何の役にも立たなかつた。Y青年は店員に一々、『これは外國へ持つて行つても、恥かしくはないでせうね。』

と念を押して、附屬品を勝手に買ひ調べて呉れた。俺が一しよに行つた甲斐があつたのはカラを買ふ時、頸の大きさを計らせたのと、タキシード用のエナメル靴を、足に穿めて見た事だけであつた。

爪先の漆のやうに光る、蝶形の飾のついたエナメル靴を穿いて見て、これを自用にするのかと思ふと、心ときめく。娘のやうな心があるなと思ふ。

買物には欠伸しながらついてつた俺も、これから晩の食事だとなると勃然として勇氣が湧き上つた。出口で弟子のSに遇つたのを一しよに連れて、俺はさつさと神田行の電車に乗つた。神保町の支



那料理へ彼等を導いた。

一口に頬張れる蒸し立ての焼賣や豚肉と竹の子と、葱が脂で煮られ、その滋味は濃漿となつて、彼等自らを和へてる炒肉皮や、白黄の卵の肉を嚙むと、脆弱な白い蟹の肉が、舌の上へ別の味で抜け出て来る芙蓉蟹や、飯の中に混ぜられたいろ／＼のおいしい具が、印度更紗のやうな配色を呈して居る揚州炒飯やを並べて食べるうちは、しばらく浮世の苦澁を忘れさせられて居る。

『うまいだらう／＼』

と獨りでうまいだらう／＼と獨りでうまがつて食べたが、弟子のSは同感して競争して箸を下したが、Y青年は生返事だ。

どうしたのだと訊くと、支那料理は濃厚過ぎて僕には向かないといふ。

『では、折角来たのだから、僕が上等の洋食を御馳走しよう』

神田から外濠線で數寄屋橋へ廻つた。弟子のSと訣れ、鍋町の風月堂の二階へY青年を連れ込んだ。

佛蘭西風の料理方を、更に日本人の嗜好に合せ勘考へたこの店の料理は、瀟洒として居た。質素なお仕着せに角帯を締めた服装で雪の如きナフキンを腕にかけ、言葉少なに皿を運んで来る手代のウエーターも、不思議に食卓に調和して居た。

『もつと何か取らうか、うんと喰へよ。』

『もう澤山です。おとうさんは大喰ひだな。』

かういつてY青年は氷菓の匙を取り上げた。

この青年の何を喰はしても同じ調子に食べてしまひ、これといつて喰べ方に感興を湧かして來ぬ、無表情なところを飽足らなく思ひ乍ら、吹き込む風に氣がついて窓の外を見る。柳の絲に若芽を吹いたか、揺れ方に重みが増はつてゐる。二十日の月。

『おとうさんは今度洋食がうんと喰べられますね。』

『うん、それが今度の世界一周の楽しみの一つさ。』

腹ごなしに銀座を歩き、資生堂の化粧部で、化粧道具の入つてゐる鞆を買つた。開くと剃刀は勿論、耳搔き爪磨きまで器用に入つてゐる。

『おい／＼、こんなしやら臭いものは俺に遣ひ切れるかい。』

『西洋へ行つたら、今迄のやうに無精ぢやいけません、少しは奇麗になさらくちや——旅行中は紳士なのですよ。』

食ものを食べて仕舞へば、氣が無くなる俺は、順々に買物して櫻田本郷町まで行つた。



其處で靴を買ふのだが、それも總てあなた任せだ。

Y青年が又世界一周に遣ふのだが、丈夫か丈夫かと一々念を押して、大小靴三箇を買入れたのを、俺は太つた腹に洋袴が窮屈になつたのを、後の縮金を外し乍ら見て居た。

これだけは自分でしなくちやならぬので、澁々東京府廳内の旅券課へ行つて、旅券下附願ひを出した。そしてその願書が外務省へ廻るのだと聞いて、一寸不安になつた。

漫畫家といふものは、日本國の大久保彦左衛門みたやうなものだ。相手が誰であれ、いやしくも世道人心に不都合だと見る時は、ガミ／＼畫筆の上で叱言をいふ。爵位、勳等、權勢、地位、財産の多寡などは、勿論眼中に無い。そしてその叱言も尋常一様の生優しいものでは無い。相手の面の皮の厚薄に従つて、それを引き剃ぐこつちのメスの種類が變る。諷刺といふメスもあれば、皮肉といふメスもある。それでなほ正氣に還らぬ奴は、罵倒といふ大鉈で脊中をどやしつける。

外務省の親方の内田康哉君も、随分當り散らした方だ。現に二ヶ月ほど前にも、外務省の大臣室に訪問して、そのくる／＼した眼と時雨降る軒端の下の鶏のやうに、身體を膨らまし、威容を作るところを繪に、華府會議の結果に對し、附元氣をいふところを文に、露骨に刊行物の上に發表した。よもやそれを見ない事はあるまい。

旅券の許可、不許可はもつと下の方で鑑査して、まさか大臣の手までは行くまい、若し行つてもそんな事を根に持つ程の男でも無からうと、萬々承知して居ながら、もし一寸でも岡本といふ奴は、けしからぬ奴だと、冠を曲けたら、そこはお上の仕事だ。事が面倒になる。

理屈で無しに一種不安な氣分、漫畫家といふものは、筆ほど氣の強いものでは無いと知るべし。

そのうち警察から高等刑事が下調べに來た。いろ／＼訊いた末、

『財産はどの位おありですか。』

この問には當惑した。

『つまりぬものが少しありますが、重なものは腕が一本だけです。こいつはうまく行くと何億圓になるか判りません。うまく行かぬと一文の價打もありません。』

『あはゝゝゝ』

老刑事はこれを冗談だと思つた。

度々催促して、漸く旅券が下る事になつた。府廳の旅券課で貰つたのを見ると、厚い鳥の子で立派なものだ。許可した名の主は、あの外務大臣内田康哉君だつた。そして和英漢三種の文で、『右ノ者貴國へ赴クニ付通路故障ナク旅行セシメ且必要ノ保護扶助ヲ與ヘラレン事ヲ其筋ノ諸官ニ希望ス』と頼ん



で呉れてある。

流石に國法は公平だ。

なほよく見ると、戸籍、現住所が書いてあり、生年月が書いてあり、俺の名前が書いてある上へ持つて行つて「生來之日本人」と書いてある。

三十七歳の今日迄、氣が付かずに過したが、成程よく考へて見ると、俺は生來之日本人だつたね。鳥の子には菊の紋がついて、褒狀のやうだつた。俺は小學で少し出來たが、中學で出來ず、美術學校で出來ず、従つて褒美らしい書ものは、生れてから一遍も貰つた事が無い。こんな立派なものを貰ふのは、一生にこれだけだらう。貰つて見て、優等生達が無理勉強する心理が判るやうな氣がした。

◎第七 信

俺のやうなものにも、送別會が四つあつた。

一つは俺の勤め先の會社の人々から催されたもの、一つのは婦女界社のもの、一つのは東京漫畫會の連中であつた。それと、も一つは個人展覽會を開いて呉れる中橋の呉服店のとだ。

勤め先のは築地の精養軒にあつた。俺は着心地を試みる爲めに、タキシードの着始めをやり、ピカ

く光るエナメル靴を穿いた。自動車を奮發した。

柔らかく彈動する車内の腰掛けに身を寄せ、右の膝を左の股の上へ載せ、窓外を走過する家並の灯の尾をひくの眺めて行くと、急に外交官になつたやうな氣がする。タキシードの左の胸がさびしい、車内に生けてある温室もの、草花を泥棒して胸に挟んだ。その代價を籠めた積りで、チップを除計やつた。

俺が會場へ入つて行くと、知り合ひが、

『ヤア~~~~~』

と吃驚したやうな眼をして、後じさりしながら、頭かぶの先から靴の先まで見上げ見下ろす。俺は調子付き、相手の引込ます手を無理に引つ張り出し、西洋流の握手をしてやる。

重役が立つて来て、俺が泥棒したとも知らぬ草花を褒める。

『岡本君、普段、悪口を商賣する人のやうぢやないね。見違へたよ。』

婦女界のは上野の精養軒にあつた。勤め先の畫室で期限に迫つた仕事をしてると、やんやと催促の電話がかゝる。やつと自動車で駆けつけると、前の餘興は済んで、一同食卓についたところだ。俺はあたふた都河氏の隣の席へつく。一皿二皿は夢中だ。それから少し落付て周圍の光景が判る。



婦人雜誌社關係の人達だから、婦人連も多い。氣が付くと食卓の斜向ひに菊池寛氏が居る。皿と皿の間の時間に膨らんだ懐の中から、何やら書物しよぶつを取出しては偷視ぬすみしてる。食後のコーヒの時間になる。別の設けの席へ集り、送別の辭に代へて洋行經驗者の赤毛布談あかひげとぞんがある。

小山内薫氏が二つの洋行氣質を現した話をした。一つは無學で大金持のAといふ船會社の社長の洋行振りだ。彼は無論語學は出来ぬ。然しあらゆる洋服の隠袋かくしへ金を一ぱい入れといて、外人から何か言かけられると、黙つて金を差出す。先方も結句この方がいゝから、向うの方で却つて面倒を見て呉れる。かくて彼は西比利亞線を通り、巴里へ無事安着した。

次は新橋で有名な割烹店くわつぽうてんの主人、鶴見に遊園地も持つてる。この人は總て日本語で押し通した。たとへば水が欲しいとする彼は、

『水だ！ 水だ！ 水だ！ 水だ！』

と續けざまに呼ぶ。ウエーターが驚いていろいろのものを持つて来る。望みのものと違つて居るうちは水だ水だを繰り返す。かくして十遍も遣り直せば、そのうち水を持つて来るやうになります。これは笑ひ事では無い、いゝ参考だ。







前のは金の有り餘つて居ない俺達には出来ぬ流義だ。然し後の流義は俺達にも出来る。でよく心に留めて置く。

次に田中良君が立つた。彼は劇界視察巡遊中、倫敦で一行と分れ、市川猿之助と二人で佛から伊へ向つた時の可笑味。巴里の宿で二人は飲ものが欲しくなつた。日本で覺えてたシトロンを思ひ出し、さういつて給仕に命ずると、生のレモンを持つて來た。今更違つたとも言へず、レモンを二つ切りにして、砂糖も無きまゝ無理にそのまま齧つた。

それから佛伊の國境で旅券調べに遇つた。猿之助の職業を訊かれ、俳優といふ字を知らぬので説明に窮した。いろいろ説いたが無効、半泣きになつて、然し猿之助が踊りを踊つて見せた。したら検査官が笑つて通して呉れた。

太田三郎君が巴里で風雅な造りの家を見に入つたら、そこはいかゞはしい家で、賣笑婦に捉まへられた話をした。まだその他に下田博士が、西洋の窓硝子はあまり綺麗に拭かれてるので、近眼の自分は硝子が無いのだと思ひ、首を出さうとして額で割り、大怪我をした話をされた。

漫畫會のは神田の支那料理でやつた。呉服店のは日本橋の鳥料理。

かくて諸事片付かぬ間に、出發の期日が迫つて來た。



前日の忙しさ、洋行留守中に催す手筈になつてる、半切展覽會の最後の繪を描いてると上野の博覽會に俳畫館を設ける爲め、出品畫の勧誘に來た人に斷り切れぬ。即席で二枚描かされる。子供雜誌の催促氏が待つて、四頁分麒麟の可笑味を描かされる。次は婦人雜誌次は呉服店の美術部の人、次が用箋商店の主人、次が出版書肆が留守中、俺の本を出版するのに序文を頑張つて書かして行く。その間に美術商が二名暇乞ひ旁、歸つてから催しの相談、時に夜十一時四十分。十二時になんなんとして、先の用箋商の主人が再び原稿を取りに來る。

家のおまへたちと碌々話しも出來なかつたね。それでもお前達は遠くへ旅立する主人を送るといふ、センチメンタルにも陥いらす、機嫌よく普通にしたのは、信仰の力だ。有難く思ふ。一寸そばか何か喰つて、又二階へ上り、弟子のSを相手に金箔の團扇を四本、半切一枚、書物の景物につけるといふ東海道の肉筆畫が二十枚。

夜中下を向いてた爲め、充血して膨ほつた顔を振り上げ、掌で撫でて居る。と、戸の隙から旭がさし込んで來た。晴々しい雀の聲。それでは、どりや出かけようか。

◎第 八 信





鼠の巢の様に、紙屑や使ひ捨てた田具が、混雑してゐる中をスポリと抜けて、障子を開けて縁側へ出た、戸を二三枚くる。

旭の光線で開きかねる目を強ひて開けて見上る、日本晴だ。再び抜け出た書齋の鼠の巢を懐かしく眺め返し、

『オ、さうだ〜。』

と云ひ乍ら、佛教の聖典と、それから、十圓のナイフを机の上から取戻して来た、十圓のナイフと云ふのは、旅行中不便だらうといふので色々の道具の、キリやコロッツブ抜きや鑿切かんきりが出るナイフを買つてきた。十圓した。下の茶の間に降りた。

茶の間には仕度が出来てゐた。

『そら、お父さんだ〜。』

出發の時間の迫るのに、膳の前に坐つて、氣をいらつてゐた一同は勇氣付いた、それでもY青年は、いくらか苦い顔して、

『サア〜五分で喰べちまうんですよ。さうしないと間に合ひませんよ。』

飯茶碗かしちやわんへ、煙の立つ飯を、無理に高く、盛つて、一同に配布した。



膳の上を見て、

『何だ、ヤア鯛か。』

と驚いた予は、飯茶碗を受取つて、

『何だ、赤御飯か。』

と二度吃驚した。

學生の合宿所の様な、俺の家庭にして、米國史研究家のY青年や、世間智の無い、お前やの相談から、この古風な心盡しが生れ出ようとは、豫期しなかつた。

五分間では鯛の片身の半分位しか喰べられなかつた。暫く訣かれねばならぬ味噌汁、篤と名残を惜もうと、二杯更へやうとすると、Y青年に叱かられた。

『御飯は其位にして、洋服をお着なさい、今日は、太郎の方が、餘程、世話を焼かしませんよ、支度をしてもう表へ出て、ビヨンビヨン撥ねてますよ。』

予は新調の、霜フリの背廣を着た。Y青年が予のネクタイを結んでくれ乍ら云つた。

『ちよつ忘れた、おとうさんに、この結び方を教へておくのだつたのになア。』

不器用なおまへの支度の手間取れるのは、いつも同じだつた。この動作に入ると、おまへは、時聞を超越した。

これより先、俺のこんどの洋行の企を聞いて、山陰道の米子の友人野阪君から、祝に非常に大きな鯛を送つてきてくれた。この友人は最初俺の漫畫を愛好する關係から友達になつた人である。商人ではあるが、趣味と飄逸を持つて居る。そして季節々に、心にかけて郷土の産物を送つてくれる。其の送り方が彼には趣味を持つた道樂なのらしい。いつも、意表外の物や、一癖あるものを送つてくれる。そして届いた時に、俺がどんな顔するか、それを豫測して、一つの歡興に入るらしい。大袈裟に云へば、送り物が彼の藝術なのである。如何な奇抜な並外れの物を送つてきても、その品には必ず細心な且秀れた常識の詮衡を加へられてあるから、けつして受取人に不禮や不便を與へる様な事は無い。此の點は贈答品藝術の妙諦に達してをる。

俺はそれに對して返事をめつたに出さない。感心したり、苦笑したり、微笑したり、兎に角、その贈り物によつて與へられる感じの儘に動いて、それをもらつておく。俺はこれが眞實の贈答品藝術に對する鑑賞の仕方だと、筆不精の自分を辯護して居る。

こんどよこした、大鯛も、祝の心を漫畫的に強調しようと思つて、苦心して探し出した彼の藝術品である。餘り大き過ぎて、鯛と云ふ感じはしない、年を取つて頭が紫色に白茶けてゐる、目の周りが



黒く、近頃流行の丸い鱧甲の黒目鏡をかけてる様だ、釣り下けると子供の太郎と同じ位の丈だ。

鯛を見て起す目出度いと云ふ感じも、この鯛を見ては、呆れ返つて引込んでしまふ。

俺はこの鯛を見て直覺的に或る考へが浮かんた。それで出發の時に弟子のSに酒一升の貧乏徳利とこの鯛を持たして自動車で先にステーションにやつた。

我等の乗る別の自動車が來た。出立とうとして玄關の土間で靴を穿き了ると、後から、おまへが呼んだ。

『旅行中のお守りを上げませう。』

と、さう云つて、俺の小指におまへの穿めつけの指環を無雜作に穿めてくれた。

『さうか、それは有難う。』

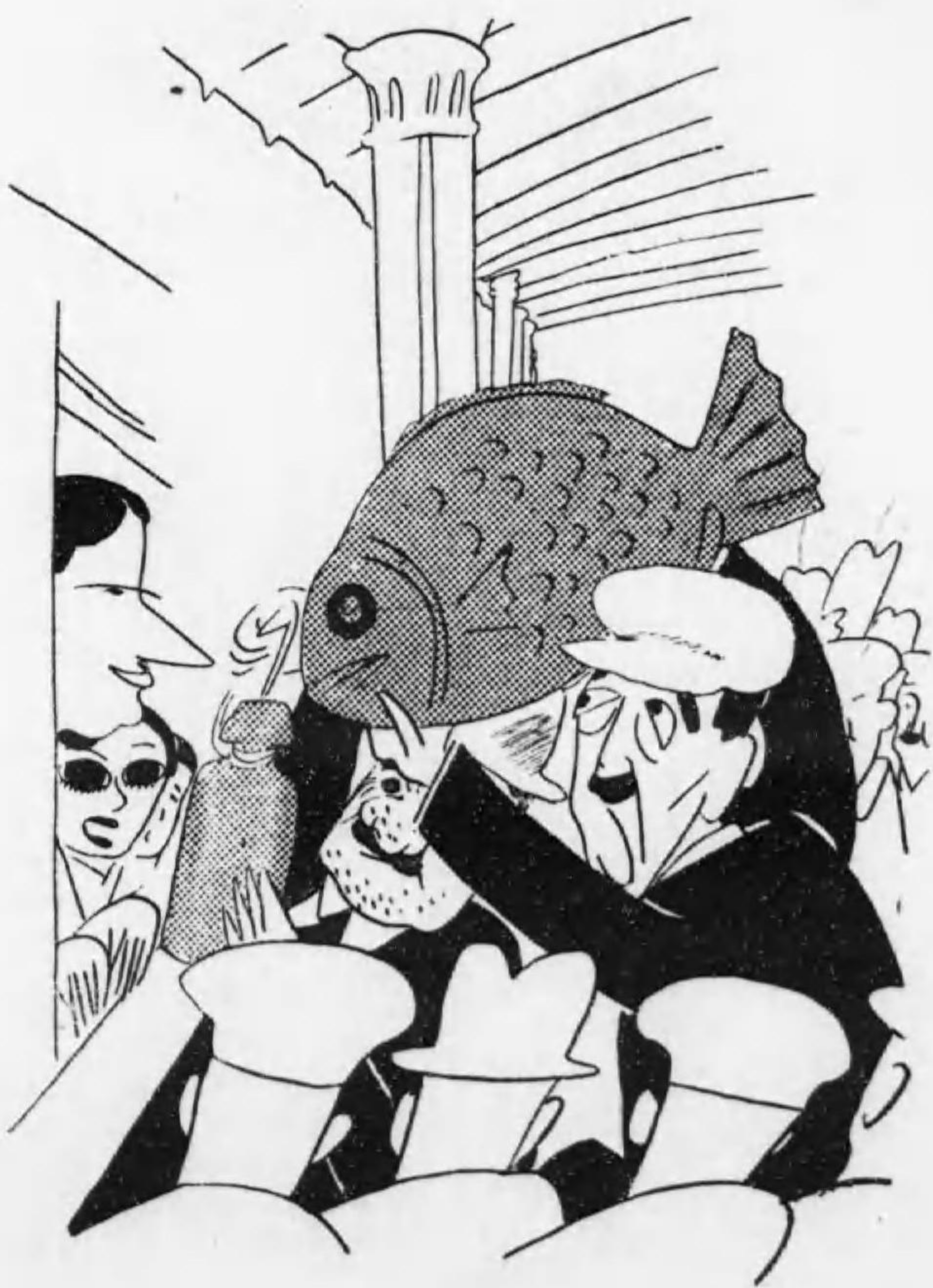
俺も無雜作にお辭儀をした。これらの仕打も、俺達の十年間の火や水で湯搔かれた今の俺達の白い心境を知らぬ人には、甘たるく、嫌味に取れる事だらうね。

家中でステーションに向つた。

◎第九 信







ステーションには、見送りの人の名刺受の場所など、ちやんと出来てゐた。そして見知らぬ人が、俺の家の代表に成つてくれて、丁寧に御辭儀してゐた。

婦女界社の人が挨拶もそこそこの予の腕を取らへて活動寫眞を撮りに又驛前へ連れて行つた。自動車の中から都河氏が應招<sup>おんしょう</sup>いて、俺を車の中へ導き入れた。

活動寫眞の撮影機が控へてゐる、其映寫圈内のステーションの玄関へ自動車を乗つけると、誰か扉を開けてくれる。すると先づ第一に都河氏が大いに濟まして下りて行く、次に俺が下りる、其後から都河氏の夫人、次に小さい娘さん達が綺麗な袂<sup>たもと</sup>を金魚の様に閃めかして下りて行く順序だ。

活動寫眞機のレンズが睨<sup>にら</sup>んでゐると思ふと、どうも態度が自然にいかない、芝居をしてる様に自然と片脛<sup>かたすね</sup>を張たくなる。

『どうも拙いなア。自動車を、もう少し大きく廻さなければいけない。』

と活動寫眞の指揮官が手を振る、そこでまた、遣直す。ドアを開けて出る時には、先きと同じ様な勿體らしい顔をする、又失敗だ。何遍もやるので、顔の筋肉が怠<sup>だる</sup>くなつた。漸く許されてプラツトホームに入る、色々の關係者が送つて来て居てくれた。

俺は一々此等の人に、俺の様な、交際下手の者に、よくも、こんなに多くの方が好意を以てくれる



など、意外に感じた。

然し悪い心持ちではない。

汽車に乗り込んでからも、窓で又一通り挨拶する。この間ごちやごちやして、何が何だか判らない。唯混雑の中を揉みに揉まれて、兎も角、家の者一同が俺の近くの座席に乗込んだのを見てホツとした。

急に氣になりだしたのは例の大鯛だ。俺はプラットホームに又出て、又そこらを探し廻つた。

『Sはどうしたらう、あいづ眞實にしようが無い、オーイス！』

俺が餘りまご／＼するので、平福百穂さんが訊ねた。俺は鯛に付ての企てを急いで話した。處へSが持つて來た。

『そら早く／＼。』

平福さんが手傳つてくれた。この老漢も、かういふ場合には子供の様な藝術家の無邪氣さを出してくる。そこへ見送りに來てた漫畫會の連中の鼻先へ、かの大鯛と一升徳利を突付けた。

『皆な有難う御座います、御苦勞様でした、——つまらねエもんだが、これで一杯呑んでくんねえ。』

俺はわざと、かういふ下素な言葉で云つて渡した。案の通り、漫畫家達は鯛に吃驚した。そして、流石の猛者達も早速の始末に窮した様で愉快だった。

『かつちけねえ／＼』

忝ないといふ言葉を、こんな訛辭に云つてそれから誇張した手付をして、漫畫家の亮さんが受取つた。そして汽車の出發する時に、仲間は漫畫會の恒例の手打の式といふものをやつてくれた。

『ヨーイ、シャン、シャン、シャン、シャン』

二十名ばかりの手が、一人の人が叩く様にうまく揃ふ、其の拍子に連れて、亮さんが、かの大鯛を振上げ、波を打たせて空中に泳がせ、そして最後のシャン、シャン、シャンでその鯛が、俺の鼻の先へ喰付いた眞似をする。みのさんは貧乏徳利を振つて踊り乍ら調子を取る。

『皆な有難う／＼』

と俺は御辭儀をした。プラットホームは笑聲で満ちた。

俺は潜越ながら日本の漫畫界から頼まれて一足先に世界を見てくるのだと云ふ責任を感じた。それは重き苦しき責任ではなかつた。

汽車は今高架線の上を走つて行く、窓外兩側に見える、都の屋根の景色も今日は違つたもの、様に新しく光つて見えた。俺の肩を叩くものがある、振返ると、杉村楚人冠氏であつた。俺に握手をして、そして俺の耳に私語いた。



『○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○』

この言葉は外國に再三往來した先輩が、後輩の洋行者に向つて與へる助言としては、至切至要のものであつた。流石に譯知りの楚氏であつた。然し、これは紳士が紳士に對しての耳語である、公表を避けずばなるまい。

唯この助言の内容は、品行方正の楚氏の必要としなかつた如く、予も亦其の厄介となる必要の種類のものでなかつた事を一言しておく。

『有難う御座います、然し僕は其の必要もなささうです。』

俺がさう云ふと、楚氏も、

『ハ、ハ、君もさうか、そりやアい。』

双方軽い笑で笑ひ飛ばしてしまつた。

楚氏は新橋驛で降りた。

賑かな落付かぬ心で、こちら側の俺もおまへも家の家族達も乗込んでゐた。前の腰掛けの都河氏の一行も、恐らく、さうであつたらう。櫻木町に着く迄に、無闇に人に紹介され又こつちからも人を紹介した様に覺えてゐる。

自動車で波止場へ行つた。

波止場には大きな割に輕快な感じのする縁に塗つた客船があつた。これが俺達の乗る、一萬三千五百噸のシルバーステート號だと知つて、非常に頼もしく感じた。又西洋を見物に行くと云ふ、好奇心に満ちた興味が勃然と湧いた。

『まア、立派な船ですね、これに乗つておいでなら、わたし安心しますわ。』

さう云つて、おまへは、頼もしさうに眺めてたね。

『早く中に入らうよ〜』

と云ふ子供を制して、波止場の中にある建物内の休憩所で休んだ。大分人が混み合つてゐた。向うの方にある一團が矢張りクツク社がこの團體で中の一人の銀座の文房具屋さんの一行であつた。文房具屋の主人も居て遙かに目禮を交したが、相手は派手な商人だけに、見送人も多く、花輪や贈品が卓上に堆く積まれてゐた。俺はその間に注意されて旅券を持つて、波止場の根元にある水上警察に判をもらひに行つた。

別段故障の出る様な、事情があるのでないから、無事に判を押ししてくれるのは判りきつて居る筈なのに、かういふ、鹿爪らしい官省へ入ると、何となく不安に襲はれるのが俺の性分だ。俺はどうも生



れ付き、お上の役人と、川魚の料理と、男の腰巻は蟲が好かぬ。

判を受けて、又休憩所に戻つてきた。婦女界社の一行の休憩所に案内されて、此處でも又活動寫眞だ。段々氣配が切迫してくる様だ。紅茶を呑んでるのだが、氣が上づつて、丸で味がない。然し長い旅に出る前の家族や近親達への別れを惜もう、と云ふやうな、憐れな心持はない。何處迄も遊山氣分、但し其遊山が俺に取つて天職なんだから、浮いた心はさらさら無い、眞面目な遊山氣分だ。婦女界の人に切符を渡されて、船の中へ入る。見送人を制限されたが、やがて、うまく掛合つてくれたと見えて、大概の人は入れた。鞆でない者は足袋はだしで入つた。

船の入口へ入るのに高いものだから、段のついた橋が架つてゐる。そこを群集に押され乍ら登つて行く。又々活動寫眞だ、最早馴れてきて橋の上を反身になつて歩く、そして、わざと活動の機械の方へ顔を向ける様な厚かましさが出来た様になつた。

船の内は、もぐらの通り道の中へ入つた様だ、何處が何處やら判らぬ。まごついてゐると、誰だか知らぬ人が、どうやら定められた俺の室へ導いていつてくれた。室の中へ入つて調べると、何時の間に誰やらが、荷物をちやんと持込んできてくれてある。この船は亞米利加の客船で、装置も古くない方だ。従つて船室中は、船とも思へぬ立派さである。

『まあ小じんまりして設備がいゝのね、こんな室を一つ家にも欲しいものよ。』

おまへはこんな吝嗇たれの事を云つたね。

俺には、こんな事が云へる餘裕が、おまへの心にあるのが嬉しかった。

この場に成つて、おまへや、こどもに涙の玉の一つをこぼされたら、俺は洋行を一寸考へ直したかもしれない。

こどもは、其處ら邊りのハイカラな機械を拵つて、水が出たり湯が出たりするのを驚異の眼で見つた。これも俺が軽い心で別れて行けるよすがになつた。又探し出されて、前甲板で活動寫眞だ。俺が立つてる處へ漫畫仲間が一人一人握手をして別れる處だ。大威張りでくるもの、如才なさうにくるもの、勿體らしくくるもの、映寫の中に入ると云ふ興味でくる者、各々性格や其の描く繪の趣まで、覗へて面白い。

銅羅が鳴つて一同追出される。

弟子のSが色紙の巻いたものを渡してくれた。

舷側へ出た。もう一同は波止場の上に降り立ち並んでゐた。そしてウロ／＼俺の顔を探してゐた。漫畫家仲間が一團となつてゐる。それから少し離れて、おまへ、こどもY青年、それから今やつと氣



がついたが、家に入用をする大學生M、慶大卒業生のAとが居る事だ。尙外に俺の本の出版書肆のI氏、漫畫雑誌のM氏も居る。俺の旅行の旅装を、すっかり引受けた、横濱の洋服屋が来て、兩手を舉げて、存在を證據立てるのには俺は笑つちやつた。

俺の見送り人に比べると、都河氏のは大勢で盛んに色紙を投げ合つてゐる。それに比べて俺の方は寂しい。人間と云ふ奴は底は悟つてゐても、表面の神経といふ奴が濟度し難いものだ。俺は色紙をまづ、おまへに投じた。おまへの處へは行かないで、風に流れて二三間先きのマントを着てる老爺の肩に流れた。Y青年が馳出して行つて拾つてきて、おまへに渡さうとすると、こどもは自分が持つくとせがんでるらしい。そしてY青年にいけないこれはお母さんが第一番だと叱られてるらしい。其の素振りや俺に向けて見上げた不平さうな小さな目の光で俺に判つた。よつて今度は俺は、こどもの顔を指差しておいて、そして色紙を投じた。こどもは喜こんで拾ひに行つた。家族の者や青年達に一本づゝ行き互つた。漫畫の團體の中から、催促の手が、切りに出る。残りのものを皆その方に投じた。船の上と波止場の上とで紙を握り合つて待つてゐる暇が、馬鹿に長く感じられる、一人の人の頭ばかり見つめてもられない、順々に見廻す。然し、かう改つて送り送らるゝとなつて、顔を見合すと氣まゝりが悪いもんだね。「注視」の挨拶を、それ〴〵見送りの人に萬邊なく振り撒いて、おまへ達の所に瞳を

戻して行くと、おまへ達の瞳は待つてゐて、吸ひ寄せる様に俺の「注視」を受取る。瞳と瞳と見合す事の間の悪さは、他の知り合ひの人のみかと思つたら、内の者にもさうだね。家にあつて膳の前、朝夕の外出歸宅時に於て顔と顔と見合す時は、こんな心持ちは無いが、いざ改まつて、かういふ場合になると、妙に瞳と瞳と合す事が長く堪えられぬ様に氣がさすものだね。と云つて、この僅の別れの間を目を外らしてゐるのは惜しい。俺はてれかくしの氣持もあり、又、如何に旅立つ者が心配なく行くかの心を表さうと、冗談の手真似をやつた。まづおまへを指さしてをいて、そして親指と人差指で輪を作つて俺の目にあてた。おまへの大きな目を揶揄したつもりだ。

するとお前も其の心を波取つた、冗談の手真似をして、これに答へた。目から涙の玉のボロ〴〵落ちる手付をして、其の後で微笑して見せた。

こどもに俺が彼のへの字眉毛を諷して目の上へ指で八の字を作つてみせてやると、列から前に驅出て、俺の方へ小さい拳固を上げて打つ真似する。

風が吹き出して來た。俺のみならず、舷上の人の手から棧橋の見送り人に傳つてゐる幾百十本の色紙は皆ひらひら風を孕んで、ひらく音がある。そして弓の様に吹き撻められる風に切らさじと大勢の群衆が風下の方へ流れて行く。突如漫畫仲間の人を手打の式を遣り出した。亮さんが音頭を取り、踊

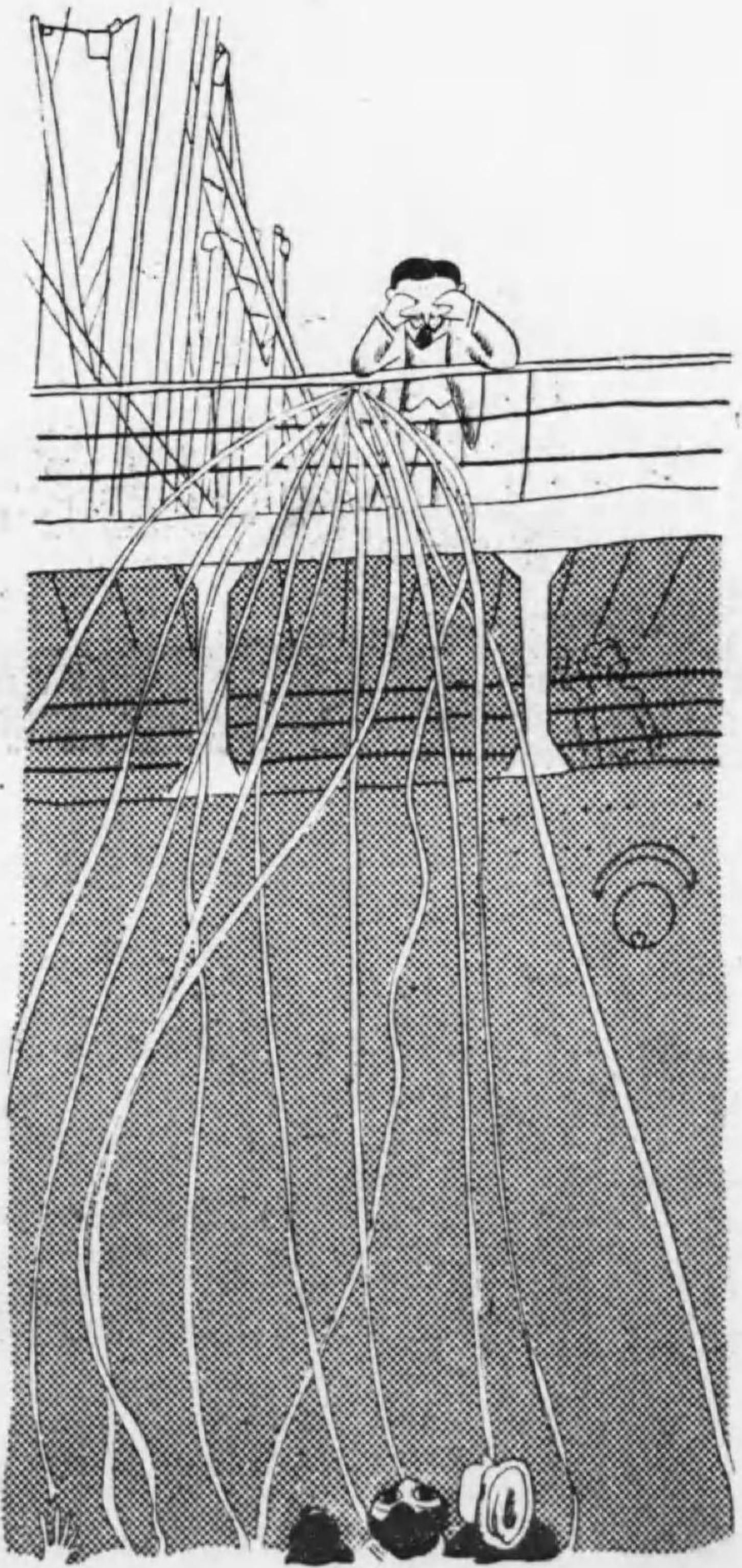


つてるのが見える。するとそれを見真似て、隣の文房具屋見送りの團體が、手を叩いてみた。訓練がないから漫画家の様にうまくいかぬ、音がまちまちだ。それを軽蔑して漫画家連は一叩き整然と叩いて隣の團體に、どんなもんだ〜と咬のかし、子供らしく挑み掛ける。そして團體が負けぬ氣になつて叩く、不揃の音を聞いて嬉こんである。

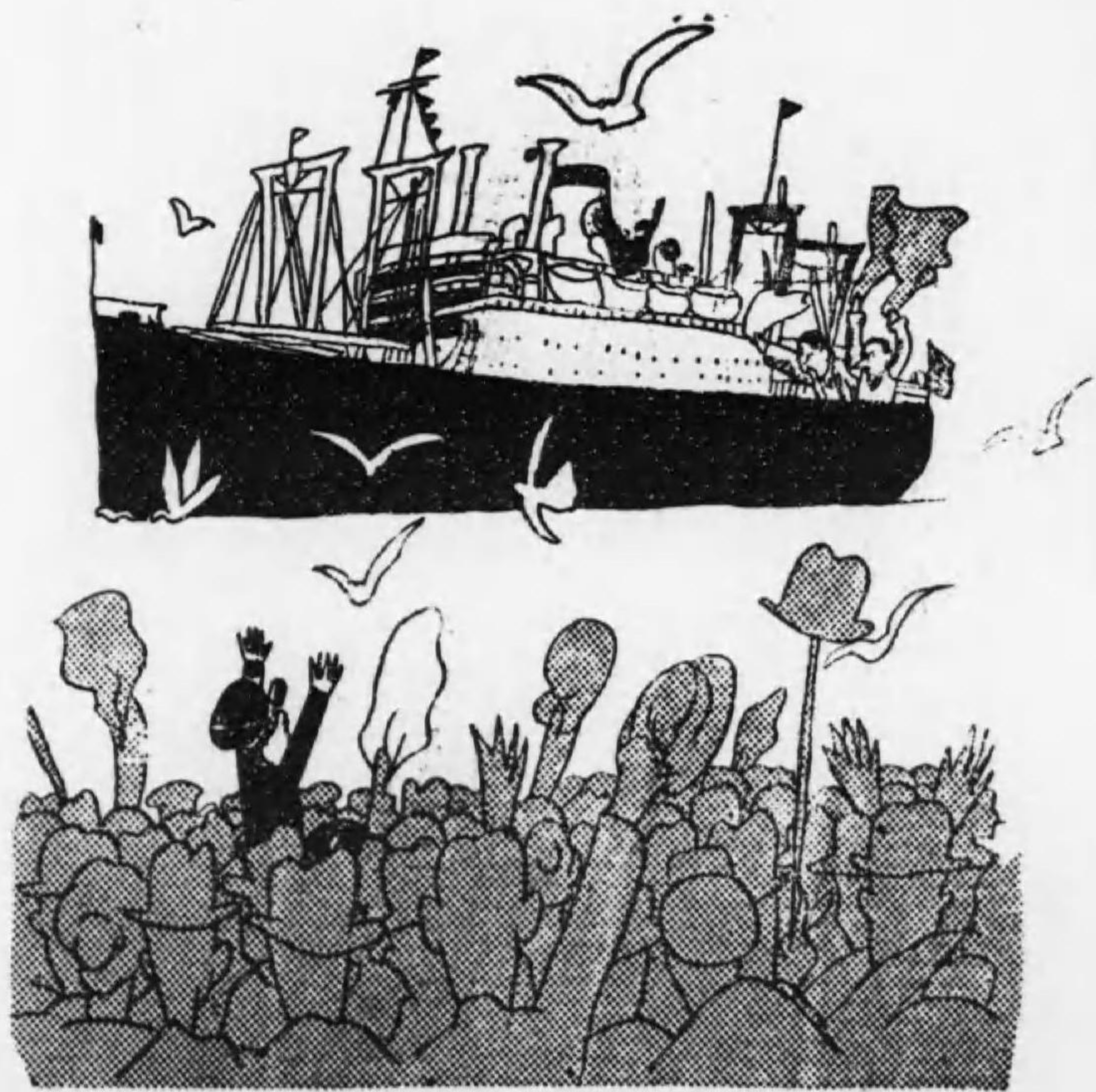
風が一吹強く吹いて、おまへの色紐は紫、こどもへのは赤、家族親近へのは白、青、東の間の遊びのわざなれど、縁の糸の切れるのは嫌だ。で、色紐をいたはつて又もや風下の方へ移る。

船で最後の退船を命ずる合圖の音が鳴つて、暫くひつそりしてる。風の音のみが強く耳につく。割亮たる樂隊の音。船は極めて靜かに棧橋を離れ出した。今は總てを放擲して、俺はおまへ達の顔を見失ふまいと、群衆に揺られ押され行くおまへ達を凝視しながら色紐を持った儘、艦の方へ艦の方へ移る。船と棧橋の間に海の波の色が光り出して色紐は遂に切れた!

俺は狂氣の如くなつて船尾へ馳けて行つた。俺は帽子を振る棧橋の上の人の後から、伸び上りくするおまへが振る手中、おまへの顔には後に残るものゝ落付と力とを示し、俺に安心させ様とする爲の明い笑を一生懸命笑出してゐたね。自分は群衆の中に埋まれて、こどもだけを高く差上げてゐるY青年、萬歳の聲が群を抜んで、それと聞取れるM大學生の叫び。それらも、群衆の動搖に折り込ま







れてしまった。旗の閃きのみ目につく、俺は俺の元氣さを見せると同時に、あくまで惜別の情を、手段のある限り現し続け様と、洋服の上衣を脱いで振りに振った。十圓のナイフが甲板の上にポタリと落ちる。その爲に新調の洋服は一週で型を崩してしまった。

『まだ見えるでしょうか、もう見えないでしよう。』

紳士らしく態度を崩さずに手巾を振つてた都河氏が云った。

室へ降りて行つた。旅鞆の上に腰を下して三人はホツと一息した。三人とは俺と都河氏と都河氏の息子の辰夫青年である。これは、この行に加はつて紐育迄留學に行くのだ。

一息ついて舷窓から覗くと、館山灣が鷹の島を抱へてゐる姿が見えた。晴れた海は紺色に且つ硬磁器の様な艶があつた。船は布良の鼻を廻つた。まづかう出發したにはしたが、何だか忘れ物のある様な氣がするので、案じてみると、わざわざ去年やつた腎臓病の再發を恐れ、京都から取寄せて持つて歩くつもりは薬を忘れた。持佛の釋迦像を忘れた。

高輪に来ては忘れた物ばかり――

東海道が大旅行であつた時には、この句で旅人の出立の心を穿つたが、今日の事情には添はぬ。東京灣を出ては忘れた物ばかり――と改めずばなるまい。



## ◎第十 信

船は陸地をさう遠く離れないで馳ると見え、後に蜿蜒した小山を背負うた房州の濱地が、丁度繪巻ものを繰り擴げるやうになほも續いて眼に入る。特に白く陽を受けて小楊子の立つ大きさに見えるのが野島崎の燈臺に違ひない。眺めて居るとそれ等や海の照りやが、ゆうべの徹夜に眼精疲労を起した眼を痛く刺し、いはうやうなき哀愁を覚えさせる。僅か四ヶ月の間とはいへ、異國の旅だ。水や喰ものも變る事であらう、毎日骨の折れる見物もする事であらう、ましてや俺は去年腎臓炎の大患をわづらつた。健康に前程の自信は無い。前途の果敢なきが胸に湧く。もし再びお前たちの手に戻れぬ事になつたら——縁起の悪い事は假初にも、想ひ出してはならぬ。想ひ出してはならぬと叱りつゝ、すぐ後に同じ事を考へてるのは、ひよつとしたらさうなる兆ではないか。すれば俺よりもお前達が可哀さうだ。俺は兎に角、今迄に可成り勝手な事をやつて来て、求めるほどの楽しみも多くない。いくらか骨も折つて生死の諦めもつけてある積りだ。然るにお前はこれからだ。お前は今迄、俺の生活の下積みになつて居て、これからが陽の目を見なければならぬ珠算盤になつてる。その責任が俺に無いとは云へない。他に家の子供や青年に對しても、俺はだらしがなくて頼み甲斐無き父兄であるかも知れぬが、そ

れでも居なくなれば張合ひが無くなるのは必定だ。何としてもお前達の爲に無事であらねばならぬ。さう思ふと俺の痼疾の扁桃腺炎が氣に成り出した。脹らしては大變だ。うがひ薬を探さう。

大靴の蓋を開ける。蓋の裏に手帖の紙を一枚破つたのが貼つてある。ペンで字が書いてある。

## 大 靴

一、洋服全都

一、ネマキ

一、クツシタ

一、ハンカチ

一、ソフト、カラト

一、ネクタイ

一、白手袋

一、ワイシャツ

## 中 靴

一、著書

一、スケッチブック

一、洗面道具

一、部屋着

一、ボマアド

一、禪、二十五本

一、メリヤス、シャツ

一、ハンチング

Y青年の筆だ。探すのに便利な爲である。彼は大きな身體の癖に細君のやうな心遣ひをする青年

かの子に與ふる世界一周の給手紙



だ。さう思ふとほほ笑まるゝ。それに禪を二十五本と大仕掛に持つて来たものだ。一人でくすくす笑ひ出した。なほ一倍可笑しかったのは、その後に注意として、(カラ、カフスは少くとも一日置きに取換へて下さい。シャツを不精せず洗濯に出さなくてはいけません。髭も毎日お剃りなさい。日本とは違ひますよ。)

と書いてある。子供扱ひが可笑しい。俺はこれで機嫌が直つた。女々しい考へも消えて仕舞つた。扁桃腺などはこの上天氣に眠れさうに思へなくなつた。薬を取出すのをやめて蓋を閉める。

置時計のオルゴールのやうな音が船中の處處に鳴り出した。出て見るとボーイが金の片を置き並べた楽器やうのものを叩いて廻つてゐる。何の合圖だらうと思つてゐる時、支那人の若いボーイが、來て扉をノックした。

『御飯食べろ』

と云つて去る。

二度目の樂器で着物を整へ、一同誘ひ合はして食堂へ出る。

食堂は船の中で一番揺れぬ中央の位置を選んである。室内は米國流の派手で大まかな裝飾を施してある。大卓、小卓が配置よく並べてある。一卓に一人づつ、白い上衣のボーイが傍に正しい姿勢で立つ







てる。その卓の一つがわれ等の爲に定められてある。航海中は朝夕この卓に向ふ事だ。圓く環になつて、十人が並び切れる。ボーイが注文を聞く。献立が英語だから譯が判らぬ。一行の附添の通譯が問答したが、相手が支那人のブロークンの英語と來てるから要領を得ぬ。黒い上衣を着たボーイ頭を呼んで來た。

『何か喰りますか』

中々本筋の日本語だ、一同安心する。後で聞いたのだがこの男は支那人と日本婦人との間に出來た合の子ださうだ。そして彼等支那に國籍のあるボーイは米國へ着いても上陸を許されぬ。船が船渠へ入り修復中も、一と處へ駐留されて又日本へ戻る。米國通ひの船に居て彼等は一步も米の陸土を踏めないのだ。氣の毒な現象ではないか。ち、何と云ふ不毛な事か。ヤンキーの船に居ても、米國へ着ても、上陸を許されぬ。兎に角日本で喰べつけの西洋料理に近いものを訊ね、誂へ、食事を濟す。この時初めて外人の手に成つた洋食を喰べて、この後三日許りはおいしがる。それは丁度、三度三度、宴會をしてるやうな氣持ちのする贅澤なものだ。

食べ終ると室へ歸り、部屋着に着換へた。ベッドに轉がつた。飽満した腹が都合よく眠を誘ふ。春の日中の太平洋上の晝寝！ 初めの一二分の程は長閑に船腹を打つ浪の鼓に聞惚れて居たが、すぐ



に熟睡に陥つた夢も見ない。

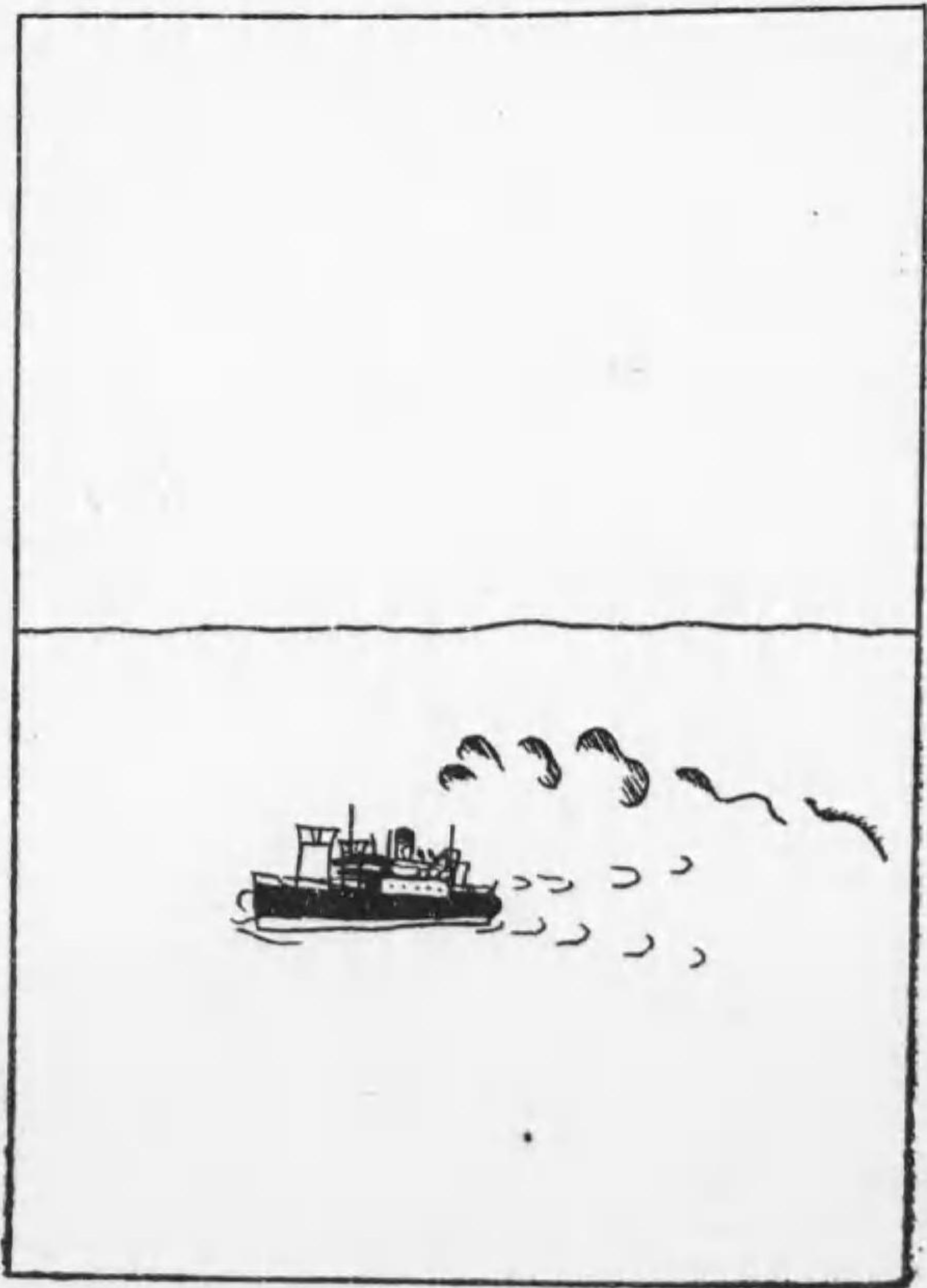
起きたのは夕方、陸地の影はもう無くなつて居る。浪も少し荒くなつて居る。甲板へ出て眺めると四方全く眼に遮るものも無き海と空の唯中を、この一艘の汽船が落ち付いて駛つて行くのだ。この時位、わが乗る船をなつかしく思ふ時はない。

何人の仕業かこの天地の色を徐々に色褪せさせて行く。極めて徐々に。

夜になつて部屋の中に電燈がついてしんみりする。かうなつてはこの狭い一室が家庭だ。仲よくする事だ都河氏が主人で、俺が、細君役で、辰夫青年が息子だらう。晚餐を喰べ終り、部屋へ引取つてからボーイに湯を命じ、俺がカルピスを溶かす。都河父子が饒別品の何やかやを開ける。交際の廣い都河氏にはいろ／＼なものが來て居る。部屋の中へ持込んだ花籠も一つや二つでは無い。俺のは一つも無い。少し景氣の悪い氣になる。さもない料簡だが實情だ。

カルピスは知り合ひのその製造會社の専務が、いつの間にか船中飲用として運び入れて呉れてあつたものだ。行届いた好意である。

喰べ且飲み乍らいろ／＼とりとめの無い話をする。愉快になつた。船中の退屈を紛はす爲にはこれに越した事は無い。この後もよく時を定めず談話に耽つた。その時は都河氏が、







『又喋べくらうかね、萩生祖徠は煎豆を嚙り乍ら天下を罵倒する時が、一番得意の時だといったが、本當だね』

こんな事を言つた。

湯が無くなる。さつきボーイと再三押問答して、湯の英語はホット・ウォーターぢやなくてハット・ウォーターと發音するのだと判つた。又、支那語ではカイスイといふのだとも判つた。再びボーイを呼んで湯容れを指して、

『ハットウォーター、カイスイカイスイ』

今度は確かだ。

永い夜咄しにすつかり、馴染んで、終ひには辰夫青年の事を辰夫々々と呼び付けにする程隔てを除けた。そして、辰夫が眠るべく俺の上のベットへ匍たひ上る時に擲なげつて足を引つばつてやつた。

### ◎第十一信

船中の生活や一行の人柄等を説明する爲には、船中で書いて、シヤトルへ着いた時お前に發送した私信をこゝに載録しよう。一つには其當時のフレツシユな感銘を失はぬ爲め、一つには記念の散逸を

かの子に與ふる世界一周の繪手紙



防ぎ度い。それは夜の船に人寝静まつた後、機關の運轉の音を聞きつゝ、ライチングルームの書もの卓の黒羅紗の上で認めたものである。それは上の隅に救命器に船の會社の印の旗を打ちちがへたマークがあり、下の隅にシルバーステート號が航行してゐる圖を印刷してある滑つこい用箋に書いたのだね。なほ手紙だけで不充分と観るところは、細説や補足を加へよう。

..... 持つて行

つたもの、中で、着物は、皆、成功した。絹のホワイト・シャツもよかつたし、支那服らしい部屋着もよかつた。あれで廊下を通つて便所へ行つてよい..... 献立表が判らないが、いろいろ研究してスープだの蟹にトマト、ソースをかけたものだの、魚肉に白ソースだの、成る可く日本で喰へ慣れたのに近いものを選ぶ。量が多くてたとへば肉ものは皿の中に、肉の他に鹽肉が添へてあり、又その向うへ銀の容器へ馬鈴薯とか丸茹での玉葱とか附く。スープの出る前にピツクルといつて胡瓜の酸漬みたやうなもの、或は橄欖の實の鹽水漬が出る。

三日位までは流石西洋人の洋食でうまいなと思つて喰べたが、直ぐ飽して仕舞つた。

なにしろ濃厚くて閉口だ。あれ程の食しん坊の俺が、成る丈け野菜の多い淡泊なものを選ぶやうになつた。ボイルド・ライスとて、炊いた飯も無いでは無いが、黄ろくて不味い飯だ。つくづく西洋人

といふ奴はシッコイ筈だと思つた。夜食には洋食の外に簡単な支那料理が二三品出来る。これで稍々凌げる。献立表によつて銘銘勝手なものを選び取り、幾皿でも喰べられる。

食事の間は音楽をやつてる。支那のカンカラ太鼓、豆太鼓を遣ひ、ひようけた未開人の囃子を取入れたやうな曲だ。騒しくて趣が少い。(註、これは後に近頃米國流行の、チャズといふ曲目の一つと知つた) 食堂に行くのに一々部屋着を、洋服に着換へ手を洗つて行くのが面倒だ。鹿爪らしく洋服を着て喰べるのは兜を着咽喉をしづられて喰べてるやうなものだ。

ネクタイが漸く獨りで結べるやうになつた。その前はみんなに結んで貰つて居た。(註、ネクタイが此時は本當に結べる積りで居たが、後にそれは手前勝手な結び方だと知れた。どつりですぐに捻れた) 朝飯を一寸書いて見る。先づチルド・グレブ・フルーツといふのを取寄る。夏蜜柑とオレンジの合の子のやうな汁氣の多い果もの、輪切にしてある。砂糖をかけて喰べる。それからプツフド・ライスを貰ふ。ひまし麥を押し潰し乾燥させたもの。穢ない譬へ方だか俺はこれを瘡蓋と綽名をつけた。それに牛乳と砂糖をかけて喰べる。飲ものは紅茶だ。小楊枝を呉れと口へ手を持つて行つて手眞似をしたら、間違へてハツカ砂糖を持つて來た。グリーン・チーといつて番茶程度の日本茶もあるが、容ものがコーヒ茶碗だから不味い。そしてそれにも牛乳と砂糖を入れて喰べろといふから參つちまふ。それで



直ぐ日本めい、しんこ、味噌汁、お茶漬などといふ言葉が一行の口癖に上る。一等船室の二十八號といふのに都河氏父子と自分と居る。並んだ室に一行が二人三人づつ居る。謂はゞハイカラな長屋だ。洗面臺の棚に大きな魔法瓶に清水が入つてゐる。魔法瓶を備へてあるところをもつて、室の中の文明的設備が推し計られよう。

俺の室はみな知り合ひだから住み好いのは判るだらう。

他の一行を紹介するとHいふ代議士は地方の新聞社長、電燈會社社長、その他この種の肩書をまだ二つ三つ持つてゐる五十恰好の紳士。東洋風の眼の釣上つた容貌を持つ。銀の茶瓶と緑茶の上等のを携つて來てる。室の中央へシーツを布き座敷をこしらへ、寝間着のまゝ一同輪に坐つてその緑茶を入れ乍ら、度度談話會を開いた。

Iといふのは、東京の目貫きの場所に大きな文房具店を持つてゐるその主人、中年の人。機敏な商人。

Nといふのは二十六七の青年。父は關西のある開港場の大金持ち、自分はその代表としてその土地の倉庫の専務をしてゐる。坊つちやん育ちにして何處か大人びて居る。無類の健啖家。

Oといふのは京都の縮緬屋の主人。恐らくこの人が一行中の名物爺だらう。洋服を着るのは今度初







めて、それから肉を喰ふのも今度が生れてから初めて、この人の靴が大きくて天保銭の形をしてるのが西洋人に餘程奇妙に思へたらしい。散歩する足下を顧つてみる。この頃は面倒臭がつて和服にセルの袴で食堂へも甲板へも出る。一層、注目を牽く。彼は濱納豆を持つて来た。時々貰ひに行く。京都風の一徹な愛嬌のある老爺。

Kといふ老建築家は一行中の年長者だ。六十以上とか聞いた。大概難かしい顔をして居る。でなければ黙つて笑ふ。その息子が附添つて來てる。他に逆はぬ従順な性質、園藝家。至つてまめで何の用事でも頼まれて呉れる。俺の寫眞のお師匠。

通譯のY君は仙臺人の一寸頑固なところを持つてる。然し仕事に細心で英語は手に入つたものだ。一人も惡辣さうな人は居ないから調和して行けよう。たゞ、この實務家許りの中に抽象的の人物の俺のやうなのが一枚加はつてるのは桁外れだ。この旅行中は恐らく詩味を語る事は出來まい。

船は金華山沖から二日目三日目とかけて愈々北行する。して北海道沖から千島と平行の邊まで達した。空も海も曇つてる中に、よく見ると紛雪が降つてる。

船は可成り揺れて一度は食堂の卓上の皿が滑り落ち、食べて居た西洋人がひつくら返つた。すると外の卓の西洋人は快活に手を拍く。滑り落ちた西洋人も別にはにかなり怒つたりした顔も見せぬ。



みんなの方を見て笑つて一寸會釋をした。日本人はかう淡白には行くまい。皿が滑らぬやう食卓の縁に杵を取付ける。コップが滑らぬやうコップの尻を濡らして置く。大きな船の揺れるのは揺り上る時から揺り下る時まで可成り間がある。揺り上つた時にこれから揺り下るんだなと待つ氣持ち。揺り下りつゝある時どの邊まで揺り下るだらうと氣を揉む氣持ち。實は叫聲を挙げ度い程だ。揺り下ればちやうと打付ける蒼い浪の腹が舷窓から見透かされる。然し瘦我慢は俺が得意の性質だ。胸が悪くても頭が痛くても我慢して食堂へは缺かさず出る。缺かさずに出るのは都河氏のフアザーの方と倉庫會社事務のN氏と俺だけだ。それで三人が船に強いといふ事になつた。他の人は知らぬ事、俺だけは一生懸命で強くなつて居る。強いと言はれるので今更弱音が吹けなくなつた。食事の後には甲板の運動場へ出て歩く。

西洋人は、男と女と必ず手を組合せて歩く。相手の無いのは男と男と手を組んで歩いてる。西洋人といふ奴は仲のいゝふりをするものだ。あの中には腹の底では輕蔑し合つてるものもあるだらう。夫婦ものと夫婦ものが運動中に出遇つた。妻君と妻君とが立話しをする。その間良人達は黙つて双方睨み合つてねばならぬ。往つて戻り戻つては行く。この事を俺は『動物園の虎』と名付けた。檻の中の虎の運動と同じだ。それから、一行中運動に行く事を『虎に行かう』で判る事になつた。







この虎をやると船量は餘程たが紛れる。西洋人の歩き方は身體が定まつてスツ／＼と規則正しく歩を運ぶが、俺達の仲間のは蛙股かへるまたで家鴨あつらの歩いてるやうだ。

西洋人の大人は男も女も顔の線がはつきりし過ぎ、尺度ものさしでひいたやう。親しみが無い。女でも傍へよると顔中に白茶うはひの生毛うぶげが一ぱい生えてる。それに比べて子供は實に可愛らしい。二人の兒が四つ匍はなに向き合になり、『ヴヅ／＼』

と犬の噛合かみあひを眞似まねをしてる。日本の人形を大事に抱へて母親に手を牽かれた女の兒もある。日本から歸る母子であらう。母親は大概籐椅子いすに寝て雑誌か小説を讀んでる。日本人のやうに、附添つきぞひきりでは無い。食事の時夫婦で着物を着換へ食卓に出るが、小兒は室の中に残して濟すまませる。情合なさけの無いものだ。親が子には情合なさけひは無いが、夫が妻に對しては情合なさけひが有り過ぎる。少くともさう見せて居る。細君が甲板へ出て來る前に、彼女の讀む書物を先に持つて來て籐椅子の脇わき掛けに載せて置く。そして毛布を擴けて置く。細君が來てその中へ横よこはると、上等の柏餅かしらもちのやうに丁寧ていねいに包んでやる。まである。時々見廻りに來て、暑いと云へば一枚剝はいでやり、寒いと云へば包み重ねてやる。鼻の下が長いものだね。然し實は俺もお前に對して知らず／＼この柏餅主義かしらもちしぎに成つて居る様だ。故にこれだけは悪口あくぐちは云へ無い。

漱石流



◎第十二信

船にジョツフル元帥が乗つてゐる。夫人も一しよ。元帥は髭も頭も白い。餘程の歳らしい。體格は大きい。猫背でよほくしてゐる。右の足が少し悪いので杖を老木の支へ木のやうにいつでもついでゐる。この老爺が歐洲戦争に勇名を轟かした驍將かと思ふ。羅漢のやうに突出で垂下がつてゐる白い眉の下に小さい眼が柔しく光つてゐる。自分が歩行が不自由なのに食堂へ入る時などは夫人を腕に椅らせてかばつてゐる。晝間よくソシアル・ルームのソファアで居眠りしてゐる。

どう見ても好々爺だ。劍を執つて戦ひ勝つ人らしくない。

總て一つの に卓越した人は却つてその道の臭みが無く、人間として丸く浮上つてゐる。俺はこの間來朝したアインスタイン博士と五六日同伴してこの感を愈々深くした。

ジョツフル元帥は日本へ使節として來た。その歸りを亞米利加の道路鐵道王ヒル氏が迎へ、自國の平和塔の除幕式をさせに連れて行くのだ相な。

ヒル氏は脂肥りに肥つた驚のやうな眼をした老紳士。動作應對振り、如才なく精力的な米國式であ

彼と少し話をして見る。

『神は海を作つたが船は與へて呉れなかつた。そこで人間がそれを造る。神は野を造つたが道路は與へなかつた。そこで人間がそれを造る。道路ぐらゐる大事なものは無い。武勇に秀でたジョツフル元帥でも、道路が無ければ日本へも亞米利加へも行かれまい。——』

總てをわが田に水を引く道路王らしい解釋。

これが彼を成功させた由縁でもあれば又彼に一種の商人臭を帯びしめる原因で、もあるだらう。

『日本の道路はいかゞですか』

俺はかう訊いて見た。

『一たい、日本に道路がありますか』

と皮肉な顔。成程、一言も無い。

そのヒル氏がわが一行の通譯さんのところへ來り、一本の和文の手紙を出し譯して呉れろといふ。差出人を見ると京都の縮緬屋さんだ。宛名はジョツフル元帥。文章の意味は、自分は豫て世界一周の志があつたが、歐洲戦争勃發の爲め目的を達し得なんだ。今度漸く本懐を遂げるのもみな閣下が戰亂を平定のお蔭である。聊か謝意を表する爲め閣下の手を通じ戰禍によつて、荒廢した市村の復活に義捐し



たい。即ち米貨五十弗を添へるといふのである。

その本文たるや、こんな簡単なものでない候文に演説口調くわうを交へ、自分は十何歳より年期奉公してその間辛苦を重ねなどいふ身の上話も入つてる。然し乍ら眞情がその間に迸はたまたつてホロリとさせるところがある。義經の腰越状にも比すべき名文だ。

『とてもこの妙な味は英語には寫せない』

と通譯氏は首を捻つた。

この手紙から一行は京都の縮緬屋さん仲々隅へ置けないといふ事になつた。俺は、

『あなた、どういふ風にして元帥に渡したのです』

と訊いてみた。縮緬屋さんは、

『相手が貴人やよつてな。扇子の上へ金と手紙と戴せて出しよりました。元帥は何やら云やはりましたが、薩張り判らん』

といつた。元帥は甲板で運動中に出會つたら縮緬屋さんに懇ねんに握手をした。

われ等の外に日本人としては神戸の材木屋さんが四人乗船した。此人々は奈良漬の小樽を持つてゐる。訪ねて行つて柔らかい大きな瓜を一本鬼の首でも取つたやうに貰つて歸り、早速代議士の例の縁







茶を銀瓶に入れ、緑茶會を開く。船暈で寝て居る文房具屋さんまでが起き上り、和服の寢巻だから『山門五三桐』の南禪寺樓門上の石川五右衛門のやうな姿をして小楊子の尖の奈良漬の一片を大事さうに喰ひ缺いて行く。店が手廣くても、巨萬の富があつても、この場合は奈良漬の一片にしかぬ。金も位も、船中では效をなさぬ。みんな人間一個の元手に還つて剩りあるものは與へ、足らぬものは乞ふ。難船すれば一切空だから自づと睦び合はざるを得ぬ。これを以て船中の功德とする。奈良漬のお禮に俺が繪を描く。

話し残したが俺は船中へ入り立てに便所が判らなかつた。で、ボーイに訊くと黙つてぐいぐい引つづばて行つた。入つて見ると風呂だ。どつちみち命に關る程の間違ちやない。俺はその儘長閑に湯に浸つた。

出てからやうやく便所を見つけ入つた。中にはもう京都の縮緬屋さんが居る。そして西洋式の便壺の上へ立つて、犬のように片足を揚げて見たり下けて見たりしてゐる。どうしたのだと訊く、

「様子が變つたので具合よう出やへん」

俺は便所の中で笑つて仕舞つた。

尾籠ついでにもう一つ書く。ある時、仲間の一人が便所へ行つたら、便所の圍の下の際から四本足



が見える。して何か叱る聲が關西の倉庫會社の専務らしい。譯を尋ねると専務は掃除の水が出るものと思ひ壁の凸部を押した。それが呼鈴であつた。ボーイが入つて来て仕舞つた。去れと言ふ程ボーイは不行届を詰られるものと思ひ用を果さうとする。その四本の足であつた。

◎第十三信

地球自轉の結果、東航する船は一日を増し、西航する船は一日を減す(西航する)

二十二日が二日あつた。この譯の説明をいろいろ聴いたが結局判らず仕舞になつた。

無線電信の室は船室から離れて、高い船上にある。電信を打ちに行つた。歸りを若い技手が引留めてこれを見て呉れといふ。片假名で書いた手紙だ。ある日本の女に與へる手紙である。あなたはいふ通り身體を丈夫にして再會を期すといふ旨を覺束ない片言で綴つてある。そしてその手紙を書く爲めに彼は國語讀本を傍へ置き、字引をひいて習つてゐる。これ程若き米人を熱心にさせるある女とは一體何者だらう。問ひ訊して行くとそれは神戸のさる町に住み、名をローズさんといふ。その寫眞も見せたが下品な洋装だ。

日本婦人の癖にローズなどいふ洋名をつけ、下品な洋装をしてゐる。眞面目な淑女で無い事は判つてゐる。然し若い技手は眞面目だ。手紙を訂して貰つたのち、







『これローズさんに教へて貰ひました。あなた、き、ましよう』

さういつて唄をうたひ出した。誰でも知つてる、俗謡『丸髷に結はる、身をば持ち乍ら——』といふ深川くづしであつた。

唄ひ終へ、

『この唄のわけき、ました。いゝ唄であります、ございますね』

といつた。それから後にも行く度びに同じ唄を唄ひ、節を直して呉れといふ。

今更事實を明し教へ諭しても始まらぬ事だ。それより雪の太平洋上、俗謡を唱ふのも後の思ひ出になるだらう。俺も大きな竹法螺のやうな聲を出して唄つた。聲が切れると船の機械のゴトン／＼云ふ音が眞面目になれ／＼といふやうに心に響いて興醒めた氣持ちだ。

遣り残しの仕事も少しは船中へ持ち込んである。責任の通信文もそろ／＼書かねばならず、讀書も怠つてはならぬ。さう思ひ乍らもう三四日で船がつくといふのに何にもして無い。雑談と虎と晝寝と食事で毎日を送つてる。その癖退屈はし切つて口癖に飽きた／＼といつてるのだが何にもしない。都河さんが始めたら俺もやらうとかう思つてるのだが、その實始められるのを心中恐れてるところもある。文房具屋さんが上陸の用意に船の床屋で頭を刈つて來た。すつかり米國刈りにして周圍を削つた



やうに短く頂上だけ、黒く丸く唐子人形からこのように残されてある。その後から行つた縮緬屋さんも同じく唐子人形になつて來た。その形が奇抜なので、それを取巻き批評の警句を吐く事で優に半日を潰して仕舞ふ。喋り飽けばすぐ何か喰へ度くなる。日本式の菓子も残り少すくなになつた。

『鹽煎餅は歸る迄補充出來ないから少し取て置かなけりや。洋食で食慾を無くした時あれを喰べると氣持ちが癒なほるよ。藥用として少し取つて置かう』

いひ乍らも罐の中を覗いてはもう一枚くで手が出る。

今夜も十二時近くまで室の中の三人喋り續けて腹が減つた。

『辰夫、何か喰ひ度いなア』

俺がいふ。

『甘納豆はどうだね』

と都河氏、

『も少し腹に溜るものが欲しい』

『僕も欲しいんだ。僕行つて何か貰つて來ら』

辰夫は扉を開けて出がけに靴を脱いだ。裸足の忍び足で厨司部屋へ行き又忍び足で戻つて來た。

サンドキツチを銀盤に盛つて來た。

『僕ね。夜中に喰ものを取りに行くのだから音が立たないやうに行つたのだよ。コック部屋へ入つて掛け合つて貰つて來た。こんなに呉れたよ』

俺達は泥棒の分け前でも貰ふような氣がした。聲の響かぬやうに忍び笑をしては喰べた。

サンドキツチを喰べて居ると鼠の鳴聲がする。船中にも鼠が居るのだな。

『この鼠め』

日本語で叱つたが鳴聲はやまぬ。

『ラット、シツ〜』

英語で叱ると鳴聲は止まつた。

『ソウラ米國の鼠だつたんだ』

俺達は又笑つた。

夜食にはこの頃例のボーイ頭が氣を利かし、白飯に牛肉と葱、椎茸、豆そうめんの煮付を出して呉れる。象牙の箸も貸して呉れる。最初の一二夜はその爲め船暈連も推して食堂へ出て、『これなら幾年だつて船に居られる』



といったのも、鹽梅が甘過ぎるので、すぐに閉口し、二三夜で又部屋へ籠城を始めた。舞踊會があつた。食堂の音楽隊が上へ出張り甲板には砂を撒く。淑女の相手になる紳士は、よく見ると見覚えの船醫や事務員等だ。船醫は船中一向病人が無くつてぶら／＼して居るが、踊はうまいので今夜は淑女達から引つ張り風だ。

船醫は乗客の踊の相手に雇つてあるものだとは今覺つた。それから西洋婦人といふものは踊の上では潔癖の無いものが、一寸出會つた許りの船員達と頬と頬を密接させ面白さうに跳ねて居る。然しこの氣輕さは米婦人だけの傾向では無いかと思ふ。

船は上陸に近づき、晚餐會があるとの通知だ。

困つたのはタキシードの黒い蝶形のネクタイを仕舞ひ失くした事だ。タキシードは船へ乗込當時、一二夜は几帳面につけて出たが他に誰も着てるものは無かつた。日本に居た時生半可な西洋通に赫されたものと判つた。で、どこかへ入れて仕舞つて判らぬ。どう探しても駄目だ。それから通譯さんが白の蝶形を持つてるのを一つ貰つて來た。

矢立の墨で塗つた。スチームで乾かし、上首尾々々つけて出ようとすると、灰色に乾き過ぎた。そこで二度染めにした。







この夜は晚餐の献立に別に變りは無いが、卓上に銘々への紙製の帽子、二人で引つ張るとバンとは  
じける玩具、巻いた色紐、鳴る風船等が置いてある。

男も女も紙の帽子を冠つて一同氣軽な子供の心になる。それから風船を鳴らし玩具を引つ張りはじ  
かせる音。ピーク、パチヤン、キュー騒しく賑かな事おびただしい。それから色紐を卓から卓へ投  
げかける。瞬く間に五彩を放つ蜘蛛の巣の中に擒となる。日本人から投げかくなれば米人側からも投げ  
返す。

この處移民問題も有色排斥も無い。愉快だ。たゞ若い青い服の美婦人の身體へは八方から色紐が集  
まる。然しその女は現に子供一人部屋へ置いてきほりにして來てるのを知つてるから俺には興が醒  
める。

上機嫌になつて卓の間を踊り廻る一組二組も出來た。



第十四信

明日の晩つくといふので一同緊張する。都河氏は書物室へ閉籠つた。これで俺も弾動がついた。部屋の一側へ毛布を敷き中靴を机にした。書き出したものは東海道五十三驛の文と繪だ。これは著書の書き残りを持つて来て仕末をつけるのである。米國に近い海の上で静岡の茶摘唄の話や、京都の壬生狂言の繪やを書いてると、洋食に飽々した心に妙に影響する。一寸日本へ歸つて直ぐ出直して來度くなる。

夜も更けて二時三時になる。機械の音と浪の音許りだ。夫許りだと思つて居ると冴えた頭に二つの音の間から不思議な叫聲が聞える。

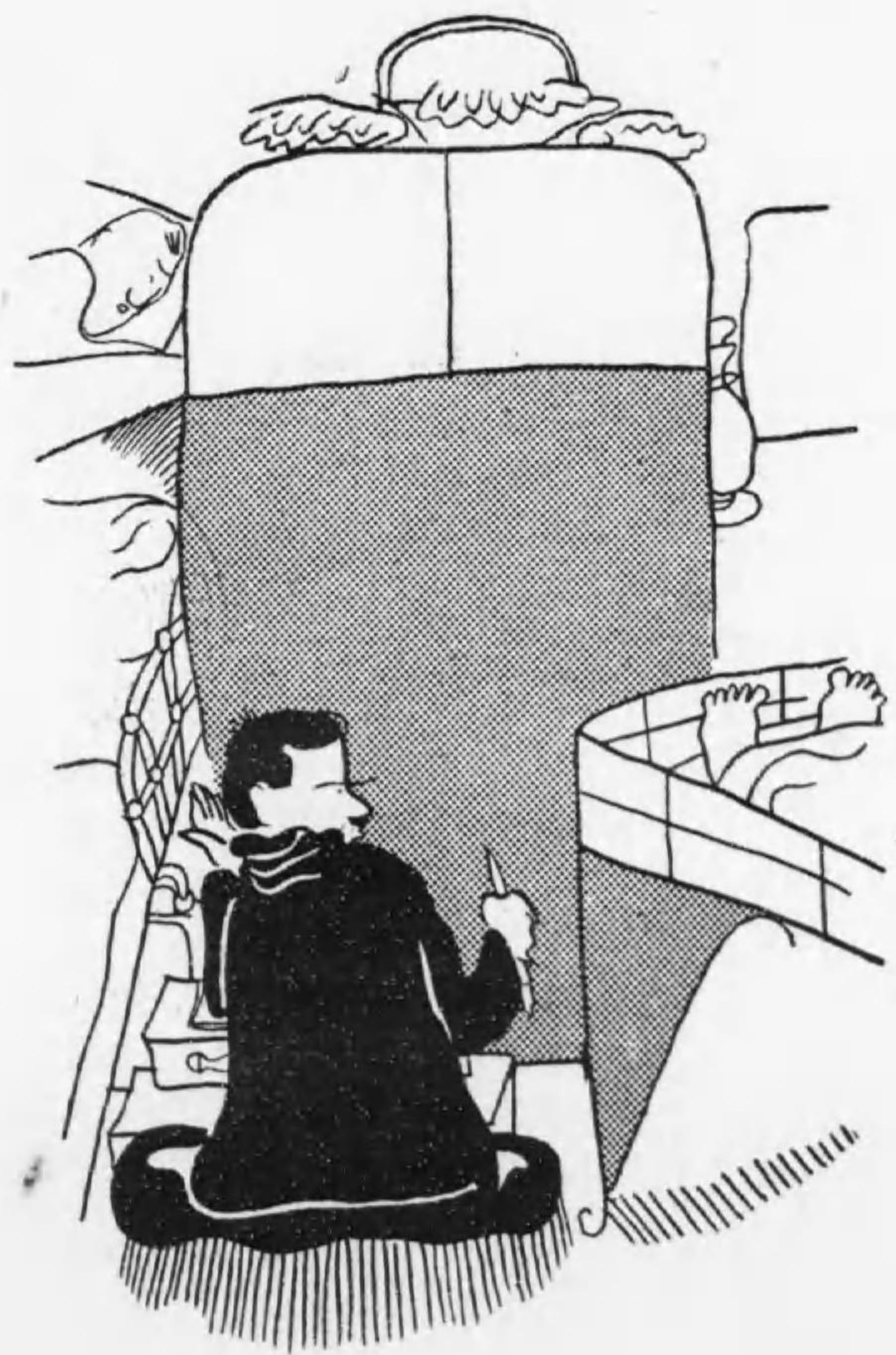
『おとうさん——おとうさん』

それはお前の呼聲である。

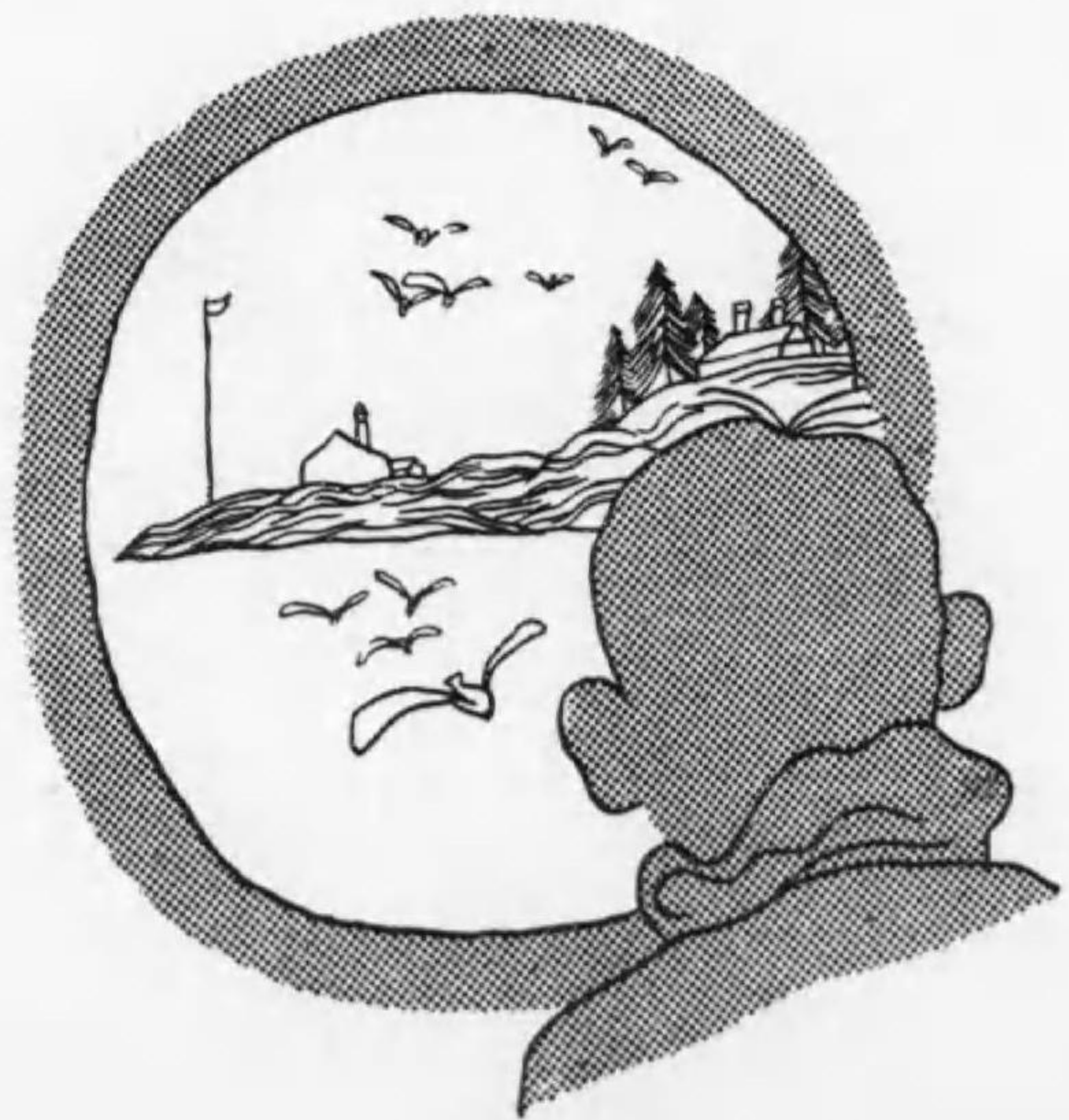
『おとうさん——おとうさん』

聲の音といひ節奏といひそつくりだ。筆に籠めた心はいつの間にかその方へ奪はれて居る、つひ、

『え？』







とか。

『何だ』

とか言ひつけの返事が口元まで出る。そして普段家のものゝ眞實に對し俺の身勝手の事のみが思ひ出される。俺は悲しくなつた。頭を垂れてお前達の爲に祈禱の文を唱へた。家に居る時にもこの通りであれば問題は無い。

だが人間は皮肉に出来る。その人の前に居れば割合に有難味を感じないよ。

然しお前は俺の事をセロの絲のやうな太い神経だといふが、俺だとして時には本當にバイオリンのやうになる時があるのだぞ。

晝間一寸寝て又仕事を續ける。第二夜が來た。夜十時を告げられて左舷へ出て見ると、

灯だ！ 灯だ！ 灯だ！

今迄張合ひの無かつた空虚の闇の中に少くとも生ける息吹きを感じさせる相手が一つ見えた。それはビクトリア島の燈臺であつた。

灯の瞳はある僅な間眼蓋を閉し、又こつちを見るやうにばつちり開く。

一つの胡麻程の灯だがあれが後に米大陸を控へてる證據になるのだ。この小さき光を媒介にして草



や木や家や人やを自由に生息さす土の大塊が俺に語りかけて居るのが感じられる。さう思ふと陸の精気が俺の身體に浸み移るのを覺えた。魂がしつかりした。

灯の眼よ！ 殖えよ〜！

子供の心になり胸に手を置き、さう願つて居ると頓て三つの灯が見え出した。

他の人も、

『まづこれでやつと無事につけました』

『こゝからなら難船したつてねえ、何うにでもして陸へ着ける』

こんな事を言つては祝し合つてる。一同安心して部屋へ引取つた。

その夜も俺は夜通し仕事を續けた。時々筆を留めて楽しみにして舷窓へ寄つて見る。灯は殖えたり減つたりした。

曉の色が透く頃になつて船は停つたらしい。あたりが急に靜かになつた。覗くと祝福すべきかな。すぐそこに陸が見える。踊る心を靜めてなほもよく見るとそれは一つの岩鼻である。粗い皺の入つた嘴角が突出て居り、赤い屋根の番小屋、旗竿に旗が立つて居る。それはどう見ても石版繪で見覚えの、外國の色なり形なりだ。

『外國だ！ 外國だ！』

俺は狂喜して都河氏を起した。都河氏はみんなを起し廻つた。雑誌の讀者に對するまめな處を出したのだなと思つて俺は笑つた。それから甲板に跳ね出た。

岩鼻からずつと大きな陸に續いて居り、陸は大部分寒帯の樹らしい森林に覆はれて居る。然し乍ら處々に赤屋根の洋館の一層外國臭いのが點在して居る。

停船した船の周圍には白い鳥が群をなして集つた。それがビョ〜と鳴いて居る。船の腹に見も慣れぬ丸い袋のついた大きな藻が浮き寄つてる。われ等が船は祖父のやうな太い汽笛を鳴らすに對し、孫のやうな細い可憐な聲を擧げて一艘の豆のやうな汽艇が近づいて來た。檢疫船さうな。

一と休みして船は動き出した。

船は森林の覆へる高き陸と陸の間の内海のやうな處に行く。船中では移民官の旅券調べが無事に済んだ。今度は檢疫だといふ。いくらから心配し乍ら指圖される儘に歩いて行く。何處にもそれらしい人が居ない。この儘進めば入口から甲板へ出て海へ落ちて仕舞ふ。

檢疫醫は普通の服装をして、旅客に惡感を與へぬやう目立たぬところに立つて居たのだ。顔色だけで判じて通すのだから判なかつた。



晝飯を食つても内海はつゞく。間にピクトリア港の棧橋に一寸立寄る。こゝは英領加奈陀。宙に浮く心には晚餐も咽喉へ通らぬ。それからしばらく経つて遂にシャトルの棧橋についた。その大きな市の夜の景色！

繫船の入江の先に一つの長橋があるらしく闇の中に更に濃い黒線が横に長く引かれてある。その上に流星のやうに自動車の灯が飛ぶ右手へ大きく丘に高まり觸れば溶けさうな青い灯の珠數玉が縦横無盡に張られてある。灯の寶玉中の王として處々に白金の光を放つ金剛石も澤山縷められてある。丘の陰に遠く海と水平の位置のところは極めて賑かに灯は集まり重ね、扁平の強き發光體をなして居る。空に白い息を吐きかけたやうなサーチライトも七八ではきかぬ。

中にも縦或は横に組まれて光を放つ歐字綴りのイルミネーション。それが如何に遠き國よりの旅人に對し、外國へ來たといふ感じを強く與へたであらう。

許されて船を下りる。下りたまゝに一つの建物に入る。税關だ。アルファベット順に區分けしてあり、各頭文字に従ひ部屬の場所に荷物を卸して検査を待つ。混雜の中ゆるゑ一行の連絡も亂れ勝ちだ。俺一人のところへ雲突くやうな大男の官吏がやつて來て鞆を開けると手眞似をする。

## ◎第十五信

鞆を開けてやると可成り綿密に調べた。調べ終へ今度は俺が抱へてる新聞でくるんだカルピスの罐に眼をつけた。米國は禁酒國アルコールの混つた飲料は一切入國させぬ。指してむづかしい顔をして何やら云ふが判らぬ。胸が少しどき／＼し出した。

『ソフト・ドリンク／＼・ナットワイン』こんな英語でいくら強くいつても通ぜぬ。しまひには引つたくりさうにする。そこで俺も腹が立つた。例の十圓のナイフについてる口金開けを抽出し、罐の口を抜いて税關吏の手首を掴へ掌へ垂らしてやつた。税關吏は猫が性の判らぬ食物に逢つた時のやうに恐々嗅いでみたり指で觸つて見たりしたが俺れが、

『ブリース／＼』

といつて手を口へ押し當てがつてやつたものだから、思ひ切つて彼は嘗めた。嘗めて眼を丸くして、剽輕な表情をして、

『オーイエス・ベリーグード』

と云つた。馬鹿な奴だ。



土産の人形に税を取られた人もある。

信濃の代議士は飲酒家だ。日本からウキスキーの燻を二三本携帯し、これを首尾よく持込まうと醫者からこの者神経衰弱にてアルコール分必要也といふ證明書を貰つて來た。證明書は役に立たなかつた。洋酒の燻は船のボーイに永久に預る事になつた。

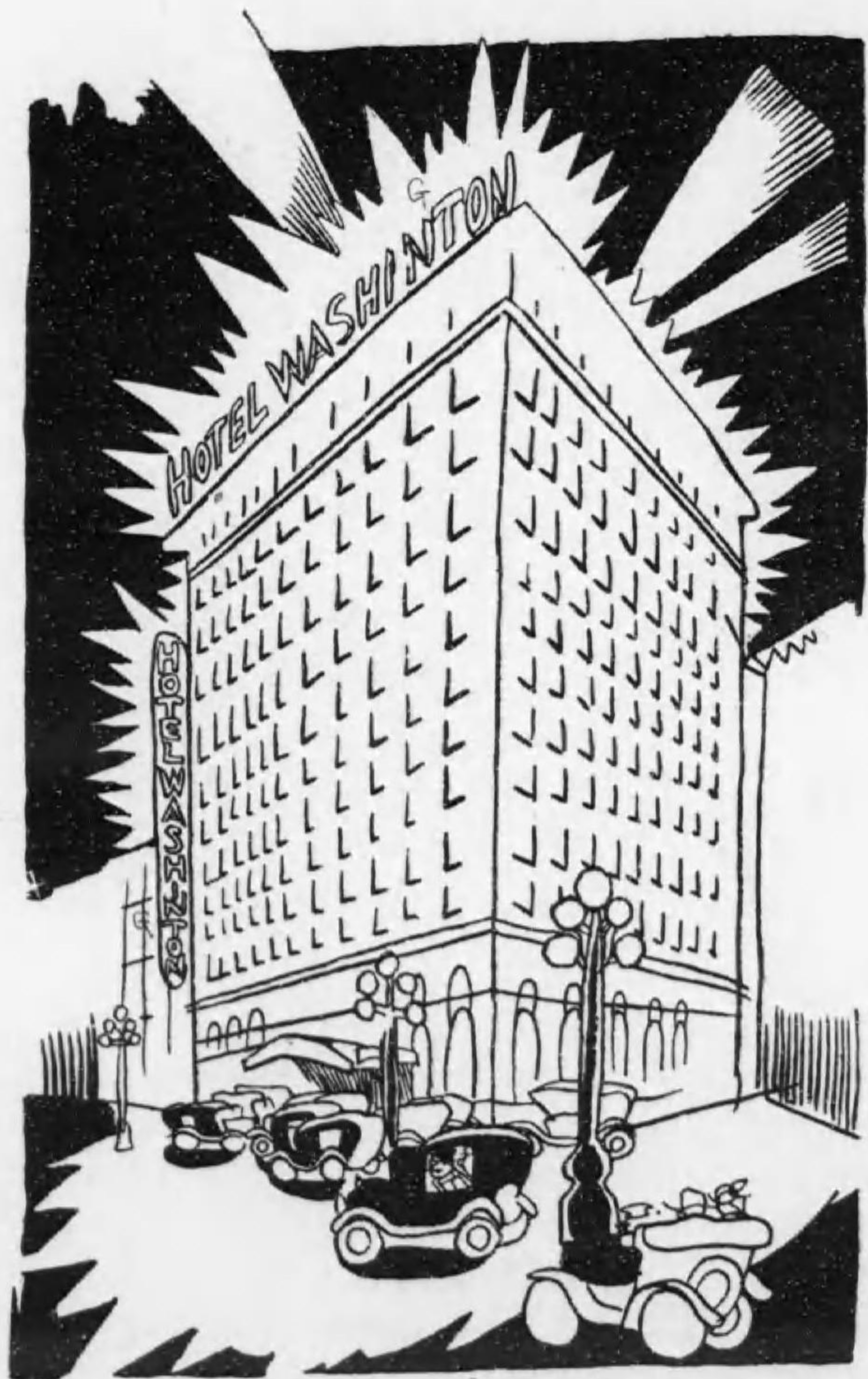
それを受取つたボーイは一たん船中へ持つて入り、今度出て來た時は赤い顔をしてフラフラ場内を歩き廻つて居た。

それでも一同はぐれもせず、自動車に分乗して町へ入つた。踊る心で自動車の窓から外の様子を見究めようとする。

闇で寂しい道でも兩側には四角い高い洋館が建並んでゐる。闇を射破る電燈の光は日本で見られぬ目も眩む程の強い燭光だ。自動車はアスファルトが石盤板のやうに滑らかに敷き詰められた上を滑つて行くのだから、過ぐる道に丘の昇降があつても可成りな急速力で走つて居ても身はひとところにとまり、輕き快き腰かけの革布團の彈動だけ受けて、丁度雲の上を彷徨するやうな氣持ち。處々に整頓して並んで建つてる繪看板の立派さ、一枚が大きく丁度八疊敷ぐらゐある。活動の看板らしく逞ましき壯漢が美婦人にピストルを擬して居る。祕密を想はせる男の黒き深き隈に配して、花の如き女の







顔は米國一流の氣の利いた浮氣な軽い線で觀者を牽きつけねばやまぬ。畫面のニスがアーク燈の白光を照り返す。たちまちに認め、たちまちに逸し去る影像ながらにその印象は米國初上陸の今の自分の心持ちに結びつき、丁度自分も傳奇小説の中に在る人のやうに思ふ。

間も無く馬鹿に賑やかな大通りへ出て、車は急に道の片側に吸ひ寄せられて行き、一つの大きな建物の下に停まつた。それはニューワシントン、ホテル。

入口には硝子で風車のやうな仕掛に出來たものがある。硝子戸と硝子戸の羽翼の間に一人づゝ挟まると、廻轉につれて室へ送り込まれる譯だ。

中は磨き上げた大理石の太い柱、電燈が煌煌と照つて居る。異花珍草が惜し氣も無く盛つてある。贅澤な安樂椅子に腰掛けて私語するもの、立つて談笑するもの、室中一ぱいの男女がみな異人だ。いよく以て本當に外國へ來た氣がする。好奇心の満足と嬉しさが足から頭へぞくぞくと擦つたく上る。たゞ、この四圍の人々の大柄でのびくした姿勢振舞に對し、われ等一行の猫脊で蛙股連が、人質になつた田舎の士のやうにキョロ／＼し乍らも、どこか日本人だぞといふ片意地を容態に示して居る。われ乍ら情無くも可憐に想ふ。その上固まつて佇つて居る一行の周圍には、赤毛布を吹聴する大小砲を山と積上げてある。



『旅の恥は掻き捨て』

この譬は普段良く無い譬だと思つて居たが、ある場合には實際人を救ふものだといふ事をこの時痛感した。

漸く室が定つた。

他の人は二人一室、俺は英語は片言でも何とかかんとか埒を開ける蠻勇を持つてると通譯氏に認められ一人で一室を占領した。

廊下で別れて俺は部屋へ入つた。荷物も間違ひ無く届いた。

俺が兎も角も始めて外國で占領した外國の建物の一室を知らせよう。

いゝ室だ。廣さは二十疊位ある。米國の事だから、こまかい裝飾は無いが、大きく豊かに全體の調子を整へてある。ハイカラな化粧臺が一、書物卓が一、肘掛椅子が一、揺り椅子一、金色の柱の建つた大きなベッド、それに浴室がついてる。

腹が減つてるところへ通譯氏が氣を利かして紅茶とサンドキツチをボーイに運ばせて呉れた。ボーイは大きな若い米人だ。誰も居ぬ室に夜更けて異人と一しよになるのは一寸怖い。でも勇氣を出して心付の銀貨をやつたら大きな異人が子供のやうな嬉しさうな顔をして引退つた。異人を使ふのも案外

容易いものだと思つて共に安心する。

さあ一人になつた。部屋は俺のものだ。この立派な化粧臺も揺り椅子も書物卓も勝手に使へるのだ。俺は嬉しくなつた。化粧臺の大きな鏡に自分を映して見た。案外ハイカラになつた自分の姿が現れた。

『君大分、得意だね』

俺は鏡の俺に向つてかう言つた。したら鏡の俺がにやりと笑つたから、本物の俺も笑つたに違ひ無い。

椅子に一々腰掛けて見る。肘掛椅子に椅ると大臣になつたやうな氣がする。此度は揺り椅子の番だ。腰を深く入れてゆらりゆらり足で弾ねて身體を揺ると、ゆつたりする。金持ちの隠居のやうな氣持ちがしたり、揺籠の中の赤ん坊のやうな氣がする。

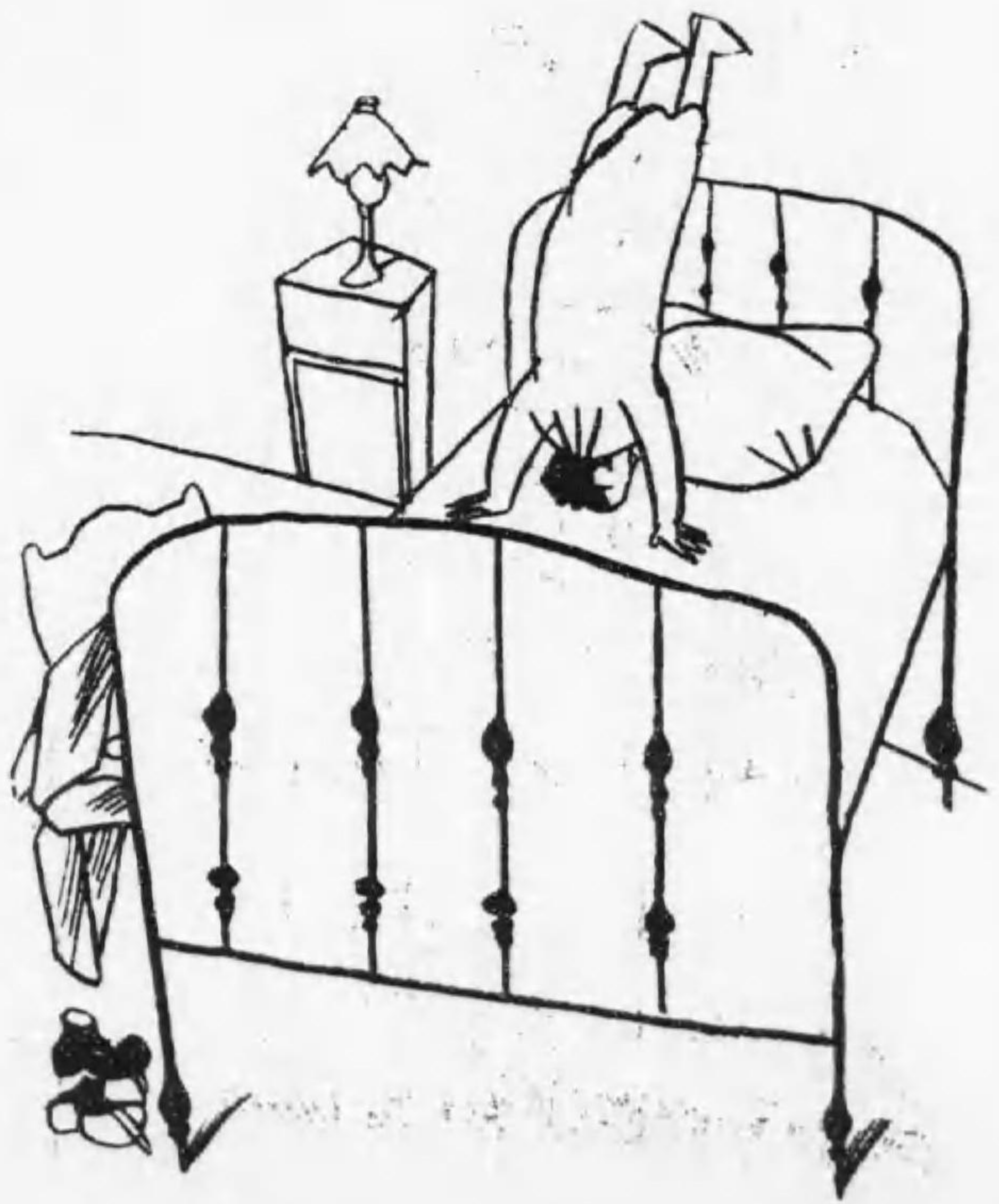
揺籠の中の赤ん坊のやうな氣がした時に、ひよいとお前の事を思ひ出した。今時分は何をして居るだらう。眞面目に俺の事を心配して居るに違ひない。若しさうなら甚だ濟まぬ。眞面目に心配して居るのに、こつちがこんな剽輕な形をして遊んで居たのでは。廢さうかな、然し考へて見るに、俺もお前もあんまり大人になる柄の奴ぢや無い。寧ろ段段、分別臭いところ、利巧なところ、尤もらしいと



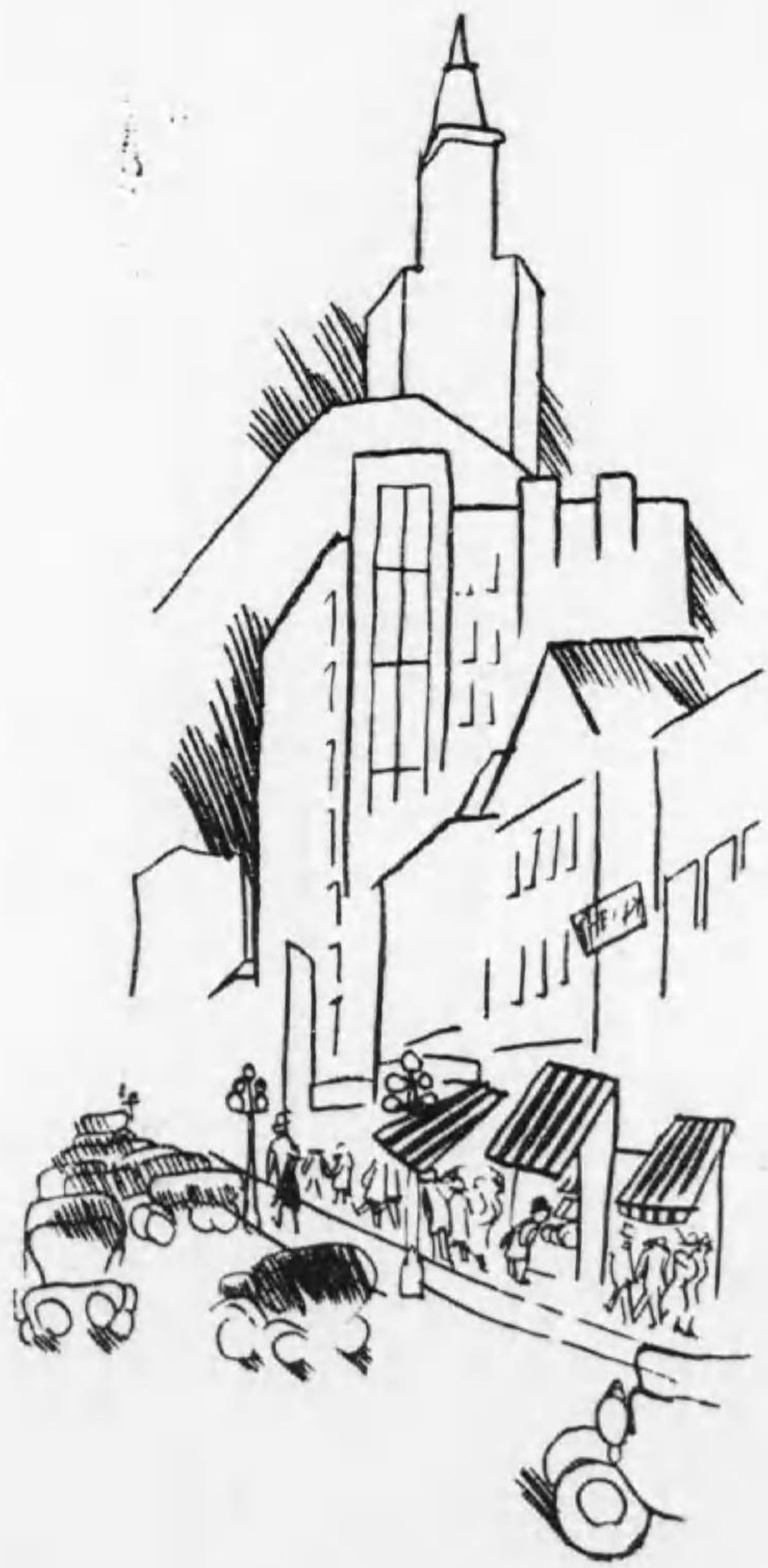
ころを振り捨て、行つて、お五が理窟無しの赤ン坊交際になつて行きつゝある。赤ン坊が機嫌よく遊んで居る心を若し赤ン坊が知らば共鳴して呉れるに違ひない。面白さに弾みがついて來た。も少し今夜は遊ばう。

今度はシャツ一枚に脱いだ。ベッドの上へ飛び上つた。底に彈機仕掛のベッドは身體の重みに窪み、雪の如き掛布が膝の邊まで快よく喰込む。ベッドは仁王が寝られる位廣い。俺は船中の窮屈さを取返す積りで子供の頬のやうな柔かい毛布の上へ大の字に寝たり、横に海老のやうに屈まつて見たり、それでも足りなくて痛快にでんぐりがへりを打つてやつた。その次は逆に足の方からでんぐりがへりを打つた。全くの自由だ。この時は世間の氣兼ねも無ければお上への遠慮も要らぬ。神様の存在さへ忘れて居る。狗ころがじやれてる無心さだ。

むかし王朝時代の名畫家鳥羽僧正は外から歸つて自分の部屋へ入ると、何とか判らぬ獨り言をいつて轉け廻つて遊んだといふ。彼は僧職に於て叡山の座主にまでなつた人、随分役目や浮世の勤めの上で、虚偽的な行爲をも強ひられた事と思ふ。その薰習を繪の方に受けさせなかつたのは彼に轉け廻る一面を有したからである。彼の狂態は冗談や戯れではない。心の真純、自由を保つ爲めの修養と觀ねばならぬ。人多く世間並といふ。尤もらしい繩に縛られ行き、形骸のみの大人に育ち易い。時には何







とか方法を採つて子供の生一本な心を取り返す修養の必要があるね。

今ふと想ひ出し、鳥羽僧正の事を書き加へて議論めく事まで云つた。それが或は俺のでんぐりがへしの辨護のやうにも當るかも知れぬが、俺は何もこの時そんな立派な意見があつて、そしてでんぐりがへしを打つたのでは無い。ベッドが愉快さに無性に狗ころのやうになつて見たくなつた迄だ。

だがこれはお前にだけそつと知らして置くのだぞ。若し世間が聞いたら俺を馬鹿にするかも知れぬ。

サンドキツチを喰べて冷めた紅茶を飲んでそれから湯に入つた。西洋の便所は可笑しいね。便器が浴槽の直ぐ鼻先に据ゑ付けてあるのだよ。

### ◎第十六信

翌朝は疲れの爲め一同寝坊して晝近く朝飯に揃つた。揃ふのを待つ間に表へ出て見度くてたまらぬ。一人で出て見た。兩側の家の巨きくて立派な事、道を歩く自動車が澤山で速い事、目まぐるしい。新聞賣子が剣突を喰はずやうに呼んで居るのが恐ろしい。道を歩く人の忙しげに速い事。俺は丁度子供が揃まり立ちをする時分、障子の棧を傳つて歩くやうにホテルから家並にびつたり身體を擦りつけ



歸り途を忘れぬやうよく見定め、先づ角の處まで行つた。それから一つ曲つた。向うに四つ辻が見える。その邊が繁華の中心らしく、西洋玩具の容れ箱をひっくり返したやうに、又は未來派の繪のやうに、勢ひに壓迫されて向うを見定める事よりも自分を用心する方に心を奪られるのが一ぱいだ。危い。俺は又家の軒並に身を擦りつけ、そろそろとホテルに歸りかけた。陳列窓の中を覗くと、一軒菓子らしいのが並べてある。もとより亞米利加の菓子は形が大きく色が妙で、鑛物の塊りに見え、鑛造細工に見える。一つ一人で買物をして見よう。中を覗くと怖ろしさうな奴も見えない。白い服を着た娘だけだ。俺は勇氣を出して菓子屋の中へ入つた。

◎第十七信

扱、シヤトルのホテルの並びの菓屋の店内に俺は決心して入つた。白い服を来た脊の高い娘が二人寄つて来た。日本人と見て用心深い目禮をする。俺は硝子箱の硝子の上より指で突つて、

『これ、五十仙』

といつた。それからその隣に並んでる棒色の卵形の菓子を同じく硝子の上より突つて、

『これ五十仙』

といつた。

すると娘の賣子は笑ひを噛み乍ら袋に容れて渡して呉れた。金を渡せば、

『サンキュー』

と目禮もする。

先づ米國へ渡つて買物も獨りで出来た。これで度胸も出る。菓子そのものに用は無いのだから、歸つて息子の園藝家に渡すと、棒色の方のは好きなチョコレートだといつて無闇に喰べた。棒色の汁で唇の周圍が隈取られた。



食堂で朝飯を喰つて一同打揃ひ自動車で見物に出かける。

自動車の速力は迅く瞬く間に郊外へ出た。大體の地勢は丘陵が起伏して居る。丘陵には例のアメリカ松の森林が太古の姿で覆うて居る。その間に介在して大小いろ／＼の形の入海、湖水が數多く蒼空を映して居る。この儘で置けば今尙アメリカ印度人が矛を舞はし亂舞する面影をも認め得られさう。然るに唐突にも神ながらの丘や森を極めて人爲的に切拓き、赤い屋根の洋館が處々に密集して居る。生え延びた散髪頭に二筋三筋髪刈器を入れた痕の様にアスファルトの滑らかな道路が敷かれてある。神ながらの湖には入海との間に運河を設け意想外の大船が群を爲して入り繋つて居る。丘や森や、自然過ぎる程自然らしき景色に對し、打算的利己的で征服的な文明の計畫と設置が一途に己れをほしいまゝにして居る。如何にも亞米利加だ。却つて不調和でない。一種新鮮の氣に盈ちた美觀が自動車の速力が操り擴げる窓外の景色に展開して行く。そして總ての景色より高く一萬尺のカスケード山が雲の面巾を纏ひ乍ら白雪の頂をもたけて居る。

湖水の展望に最も都合よきクイン丘に停車して、一行の眺望に便する。崖の上のアスファルトの道の埒に設けられた新型の燈柱、それを前景にして繋れる洋船。半壊たれた丘陵の岬に變形せしもの、湖面の滑らかな緑、而してアメリカ松の森林に腰を纏はれ、斜面に赤屋根の洋館を並べた遠景の丘陵。

一寸矢立の筆を取出し度くなつた。

順り順つて一つの湖水に出た。若くて廢船の運命に逢つた六千噸の洋船が四十三並んで居る。戦争當時必要にて一つ三十六萬弗づゝかけて造つた。船の剩つた今日二千弗づつでなくては引取手が無い。

『なんほなんでもあんまり廉いぢやありませんか。一艘土産に購つて行つちや』

かう言つた人がある。成程と思つて俺も少し財布の中を胸算用して見た。すると商人側が言つた。

『然し、日本まで持つて行く費用が大變ですよ』

俺は又、成程と思つた。

仕方が無いからこの船等を橋の代りに使はうかと、政府は考へて居るさうだ。と案内者が語つた。そこでも一つ成程だ。

お晝にホテルへ歸つて晝食だ。みな／＼手と顔を洗ひ食堂へ出た。食堂へ入る入口に女給仕が居て外套と帽子と預かる。これには十仙か二十仙の心付を遣る定まりだ。見ると側に貰つた銀貨が山のやうに積んである。亞米利加といふところは何の勞働をしても金になると聞くが本當だ。

食堂の中は廣い。それよりも天井の高いに驚く。高い天井から裝飾を凝らした電燈が北國の雪柱のやうに澤山下つて居る。周圍は鷺鼻で眼の窪んで光る異人許りだ。音を立てるとそいつが睨む様にギ



ロリと此方を見る。自づと一同忍び足になる。大きな靴を堂々と音高く引きすり平氣なのは縮緬屋さんだけだ。

一同先生に連れられた生徒のやうにクツクの案内人を中心に一つの長卓を取巻く。案内人がナフキンを取るのを見てその通りお膝に置いたお手々を出してみなく、ナフキンをチョッキの釦に狭む。先づスープが出る。一升程も入る横長い蓋をした手のついた陶器の容器になみくくとある。これを飲み切る米人の胃の腑の大きさに恐怖を感じる。然し驚きは次に出たピフテキの大きさに及ばない。これも同じく楕圓形の皿に盛りられ、一切れ小形の風呂敷程ある。牛肉の風呂敷だ。さらぬだに胃の腑はスープの洪水に汎濫して居るのにこれを出されては食慾はいよく委縮する許り。

フオークで刺してブラ下けて見てその長さを互に示し合ひ驚嘆の聲を放つ。それでも喰ふべきものと思ひ一同奮勵努力して食ふ。案内者の米人は、これを見てニヤニヤ笑ひ乍ら、菓子のパイだけで食事を済す。一食に充て得られる程のパイだから、その大きさも推して知るべしだ。國分寺の古瓦の大きな缺片ほどある。

驚きが先に立ち、ピフテキの美味不味を味ひ分けるまで精神に餘裕がない。

午後再び郊外見物。矢張り湖水があつて丘がある間を縦横無盡にアスファルトの道路上を搬び廻さ







れる。

段々景色に見慣れて同じやうにしか目に移らなくなつて來た。却つてつまらぬものに氣が付ぐ。

西洋の大工が木をひいて居た。ちやんと中折の帽子を冠つてゐる。のこぎりが日本のと違ふ。

郊外の住宅地はアスファルトの道路を狭んで同じやうな形の木造洋館が幾軒も並んでゐるあまりに同じ形なので外から歸る時など間違へはせぬかと餘計な心配だ。これ等はバンガローと稱する建築で、貸家も多いが、中にはその専門の會社で廉價に賣出し、購へばほごした木組みを送つて來る。購つた人は附けてある心得書きにより木材に打たれた番號に照し合はせ素人でも巧みに一軒の建りに組立て上げる事が出來るといふ。この式のものも随分多い相だ。

見るからに輕快で便利さうで、住んで見たくなる。住宅難の日本にも早く生れて欲しいもの、一つだが多く瓦といふものゝ必要な日本には何れ一と工夫加へねば役立つまい。

これ等の住宅町の住み心地よく見える原因はなほ屋前に道路と並んで設へられた庭園の整備にもよるらしい。それは一面に一種の青草を敷き並べ、眞に緑の毛氈のやうだ。この家かの家の區別はない。一町集つての家並は毛氈の上にある。それに主婦が草刈器をかけ或は水撒器を索いたりなどして居るのを見受ける。たゞ家々の好みは一二簡單に植ゑられた植木の相違に認められる丈だ。



説明を訊くと、日本の庭園に當るものはこの前庭であつて、後庭は物干場の如きものに使ふに過ぎない相である。

住居地附近にある野菜店が美しい。窓硝子を碁盤目に仕切り、窓の棧及び店の全體を濁りなき、緑、赤、黄等で塗つてある。それに對して窓硝子を透けて見ゆる野菜や果實の鮮かな色の配合は心を軽くする。窓の前は鉢植の草花、苗木の花で埋もれて居る。雪の如く白いエプロンをかけた店の娘が立現れたところなどは是非一枚の繪にしたく思ふ。

辻々には必ず自動車のガソリンの供給所がある。店の角にメートル仕掛けの給油柱が建つて居てゴムの管を出して居る。店も或は八角、六角、一寸小亭のやう。給油柱、諸共、目の覺めるやうな色で塗られ ある。亞米利加趣味の美の一つだ。

水のみ臺が處々に立つて居る。清い水は噴き上げては受ける盤に落つる。別にコップはついてない。行人は噴く水の頭に唇をつけて吸ふのだ。日本では行儀の悪い飲み方であるかも知れぬ。犬を牽いたいたいけ盛りの子供が来て爪立ち乍ら吸うて居る。如何にも可愛い。

◎第十八信







遂に自動車の中で退屈し出した。俺は心が弾むやうな冗談を喋り度い。

『辰夫。日本で只價の事をロハといふだらう、あの英語知ってるかい』

『知らないよ』

『では教へよう。BCといふのさ』

『はあ。さうかい。僕、今までちつとも知らなかつた。』

『日本のいろははこつちではABCだね』

『さうさ』

『だから、ロハだけならBCぢやないか』

『なんだ洒落か。なんだい〜』

ウツドランド公園に入る。動物の檻、運動器具が少し許りあるが、あとは擴大な面積。例のアメリカ松の深い森だ。アメリカ松もこゝのは何れも年數を経たもの許り見上ぐる梢は蒼空に高く抽き樹蔭は深い闇だ。道が無ければ深い森の奥に在るやうだ。漸く平坦な丘の頭へ出た。グリーン湖の碧に逢ふ。程よき崖端に小亭が建つてる。アメリカ少女が發達した長身を飛躍さして綱飛びをやつてる。

小さい森の茂みにお伽話に出て來る様な鐘樓が現れた。それを廻ると宏壯な建物。ワシントン大學



だ。一方を占めて林業館がある。建物が一寸變つてゐる。皮付の儘のアメリカ松を粗野に大きく組立てゝある。去る年の博覽會のものをその儘遺してあるのだ相だ。中を見せる。標本の大豆や林檎の大きなもの、まるで怪物だ。熊や馴鹿トナカイの剥製を最も自然に近く造つた背景の中に生きくゝとして飾りつけたもの等が興味を引く。

その年輪ねんりんを數へると六百六十二年を経て居るといふアメリカ松の大木を輪切りにしてある。幅十フイート。下を穿つて人が通れるやうになつて居る。何れも大きな口を開けてあきれ乍ら通つて見る。何でも記念になる事はして置き度いといふのが洋行赤毛布の人情。

大學を出る頃より少雨、湖畔を行く頃晴れて、向うの岸の空に虹

『オー、レインボー!』

と案内者が叫び、一同に示す一同感心する。何でも自慢にし度いのが案内者氣質。見せられるものはみな感心するのが見物人氣質。虹は日本も同じ虹だが、レインボーと洋名をつけられると、可難味がつく。たゞこれで一つ學問したのは矢張り西洋でも雨上りに虹の出る事。

ある湖水に船が澤山繋つて居た。これ等は一航海して来て、船底に貝が澤山つく、淡水の湖へ船を引き入れて置くと貝はひとりでに死んで落ちる。若し船渠ドックへ入れ、人手を費したなら何千圓の失費を







せねばならぬのをたゞで済む。俺の洒落を應用すればBCで済む譯だ。米國は何といつてもこんな自然の便利に恵まれてるからとても並んで他國は太刀打ち出来ぬ。通譯子のこの感慨に十人が十の嘆息。

湖畔をめぐつて又た公園だといふところを通る。公園だといつてもどこまでが公園だか見當がつかぬ。二つや三つの湖水を取巻いて居る。又雨が降つて來た、雨を冒して、母親と少女が春の草を摘んでる。又一つ學問した。外國人も摘草をするといふ事。この邊の山林には春は蕨、秋は松茸が出る。落もあるさうだ。牛蒡ならば町の中にまで蔓つてるとの話。

自動車の運轉手が塵除けの硝子に妙な器械を仕掛けた。布のついた棒が右に左に硝子の面を撫で、滴りついた雨垂れをひとりでに拂ふのだ。今は景色よりこの方に一同目を瞪る。

漸くホテルへ戻つた。然し晩までには時間がある。日もまだ暮れぬ。そこで、一行中の青年黨の辰夫、息子の園藝家を誘惑して街へ出た。今朝見て置いた事だがカフェーでソーダ水を飲ませる。飲むのに長い臺の前に脊の高い腰かけが並んでる。腰かけは支柱が餘程高く長身の米人でさへ足を宙にぶら／＼させて居る。あの腰かけへ一遍乗つて見度い。

それで出かけた。



一軒へ入つた。三人だから氣が強い。首尾よく腰かけへ押上り給仕にソーダを命ずる。味は何がいゝかといふらしい。考へて居るともどかしく思つたか給仕は白銅メツキの並んだ箱を開けて中を示した。それには色々な色のアイスクリームが入つて居る。着色のは不氣味だ。白色のを指すと、『イエース、バナラ』

といつてコップへ盛り、その上へソーダ水を注ぎ、薬の管をさして呉れた。

目的を達したので三人窃に顔を見合せて笑ひ乍ら飲んだ。冷くてうまかつた、一寸、木臭い香がする、これがバナラだな、又一つ覺えた。

晚餐の食堂は賑かだ。盛裝した婦人携帶の客も殖えた。そのある者は電氣燈煌々たる下に更に美しき燭臺を立て、片隅の卓に瀟洒とやつてる。どう見てもわれ等とは階級が違ふ様で、どう負惜しみを張つても肩身が狭い氣がする。奏壇に一團の音樂師が出張り、いろく曲目をやる。船中奏樂中の食事には慣れた積りでも、こゝのは大仕掛けで刺戟が強いから食事が落付かぬ。第一バイオリン彈手が特に前へ出張つて熱心さを見せる氣狂ひじみた身振りも氣になる。一曲終る毎に破るゝ如き拍手を與へては異人は悠々と食つてる。日本人とは食事に對する態度が根本より違ふやうだ。夜は疲勞れて寢た。

あくる日は休息の一日を與へらるゝ。俺は仕事の時間にあてゝあるのだが、ホテルの外に西洋がすぐあるのだからそはくして落付かぬ。朝食後關西の倉庫會社の専務が買物したいといふのをかこつけに先輩めかして連れて出た。一軒の雜貨店へ入つた。専務は狀袋を買ふ。俺は又の用意に蝶形のネクタイを買ふ。こつちの發音が悪くて通ぜね。繪で描いて見せる。俺の竹作りの矢立てが賣子達の目に止まつた。汝は畫家か？ さうだ。ではこのレデーを描いて見ろ。其處に立つて居た勘定係の娘を指した。そして大きな洋紙まで持つて來た。一筆揮つた。

西洋の娘は寫生するといつても日本の女みたいに決して恥かしがらぬ。そして描かれるべく容態振るところが頗る露骨だ。可成り突込んで描いてもサンキュウといつて嬉しがる。日本の女は正直に描いてやつても上部では有難うといふが、内心不満足の様子はありくと見える。浮世繪の美人のやうに描いてやりさへすればまあよく肖て居るといふ。日本の女が似顔畫を解するまでにはまだ餘程の年限が必要だ。故に俺は日本では首無し死體の顔と、御婦人の似顔畫とはいくら頼まれても描かぬ事にして居る。

部屋へ入つて仕事を始める。「婦女界」と「母之友」の原稿と勤先の通信と三つある。都河氏も逢ふ度びに書かなくてはといつてるが抄取らぬらしいから萬歳だ。午後になつて又外の西洋が見に行き度



くなつた。青年黨を誘惑してとまり木へとまりに行つた。例のカフェの脊の高い腰かけをとまり木だといつたら二人の青年は即座に賛成した。そこで以後ソーダを飲みに行く事はとまり木にとまりに行かうで通用する事になつた。

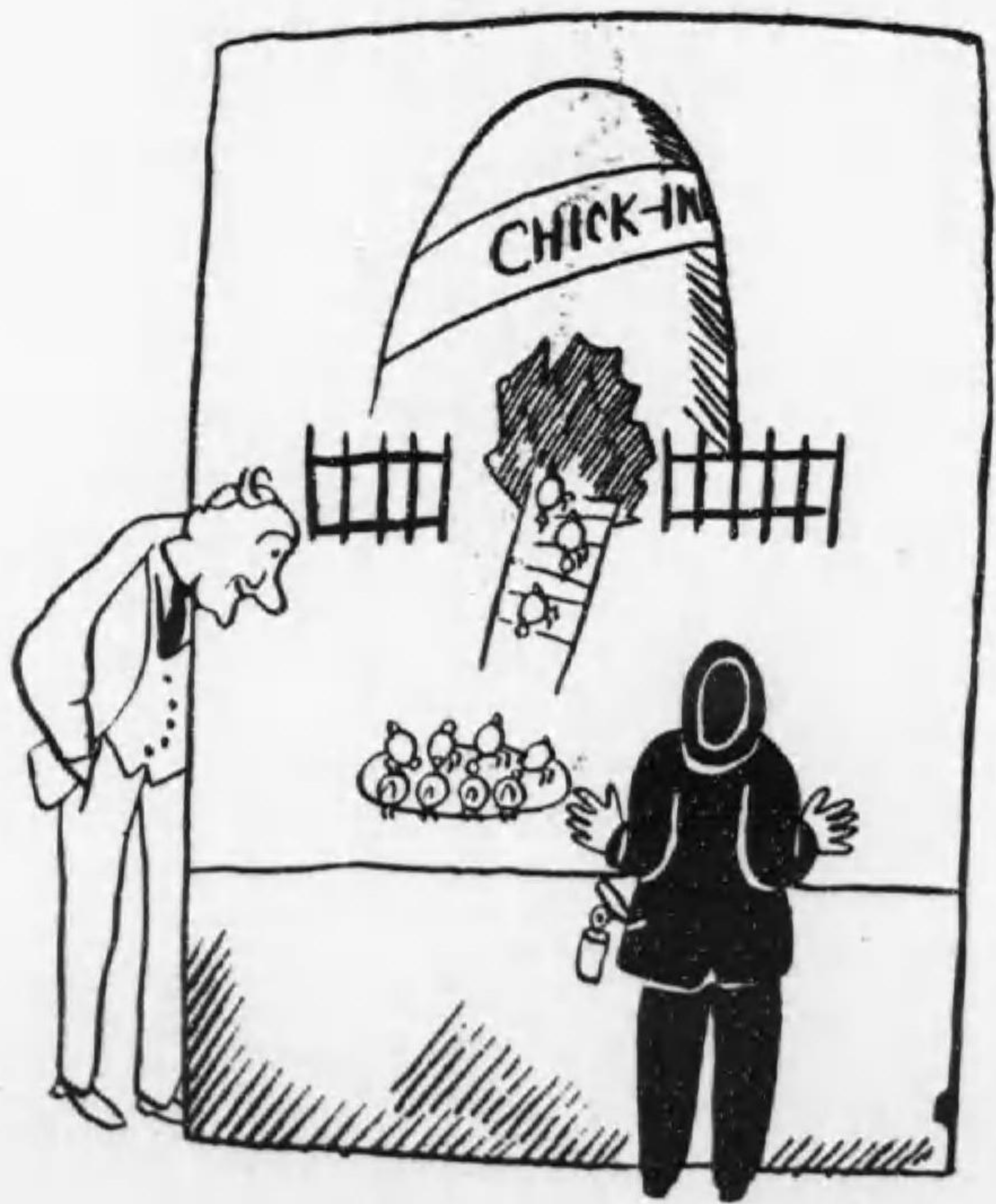
序に見廻る。何れも店頭カウリマドの飾窓の大きい事日本の家一面位がある。大きい硝子の中に並べてあるものはみな大きい。中にも食物材料品を賣つてる處を覗くと、豚の全身、葱の東人參トウモロコシの束が山のやうに積んで然も配色よく並べてある、牛肉や魚肉はすぐ調理出来るよう。一人前に切つてあるのが矢つ張り大きい。

少しも手をつけずに、機械の仕掛けだけで巻菓子ドーナツが菓子の型から離れ沸いた油の鍋に入り、頃合ひに揚り、ひとりでに網へ登つて行つて油が切れるのがある。覗く。それから雛子ツギツギが大きな玉子の殻の模型の中から橋を渡つて下り、餌を食べて又入る。生物イモノを使った陳列窓もある。覗く。するとその店のおやぢが出て来て、『お前は支那人か、ナニ日本人、さうか、飾りものが面白い。さうだらう日本にはあるまい。よく見て行つて呉れろ』といつた。一つく鼻を窓硝子へ押しつけて覗いて歩いたので鼻の先が冷たくなつた。

晩食は待ち兼ねて居た日本飯の御馳走だ。夕暮に出る。自動車を廻はして途中この市の名物トータ







ンボールの柱を覗る。米人の移らぬ先居た亞米利加印度人の建てた記念標だ。怪物のやうな面が頂から根元まで粗野に彫られ原始的の色が塗つてある。それが今自動車疾駆する四つ辻の真中に立ち、七層八層の洋館造りと睨み合つてる對照が面白い。

日本人町の、ある坂の横町を上つて行くと、右側に並んだ洋館の間に狭い階段がある。こゝまでは日本料理屋らしくない。登つて叩くと年増の女がまづい洋装をして、

『いらつしやいまし』

といふ關西訛りのある日本語でいふ。漸く日本料理らしくなりかけた。廊下を通ると部屋々々の入口に麻のれんがかゝり、一室より子供の時より嗅ぎ慣れた醤油の煮汁の匂ひがぶんと來る、それに混つて關西訛りの男女の笑ひ話しの聲が聞える。日本食に對する慾望が堪らなくなる程湧きおこつて來た。



◎第十九信

導かれた室は洋室に、床の間や違ひ棚が造作されて居る和洋折衷の部屋だ。鴨居に長額が掛けてある。文字は、

不 費 招

として署名に号堂とあるから尾崎行雄さんの筆である。

こんなこまかいところまで気がつくくらゐだからわれ等余程日本趣味に渴して來たに違ひ無い。中央に長テーブルがあつて腰かけて喰べる。安價な洋装の、若い女によつて運び出された膳の上には、擬ふ方なき日本料理が處狭きまで並んでゐる。

海老の天ぷら、うま煮、お椀、それ等も無論われ等の舌を悦ばしたが、中にも鯛のさしみと香のものは喰べると急に身體中の血液が清淨になつたよゝんな氣がした。魚の身の一片をぶら下げ電燈の灯に透かして、

『おさしみだ、鯛のおさしみだ』  
と子供のようになつて悦ぶ。

すると女中が口に手を當て、笑つて、

『それは鯛ではおへんね。シイバスだすね』

シイバスといふ洋名を聞いて食慾奴少々しよけた形だ。

それでも十日あまりの日本食の饑餓はわれ等に有無を云はさなかつた。何を喰べてもするするくと胃の中へ滑走する許り。うまいとかまづいと批評出来るのはありや味はふ余裕のあるうちの事さ。この期に及んでの日本食は丁度ひでの田圃に少々夕立が通るよゝなものだ。喰べて仕舞つて日本人としての生色を息吹き返す。飯茶碗の縁に杉箸をコチコチ打當て乍ら湯氣の出る白いご飯を頂く有難さは涙がこぼれるよゝうだ。

女中の言葉訛りを逸早く聞き取つて京都の縮緬屋さんがにや／＼始めた。

『あんた上方ですかいな、そーか、わたしも上方や、上方は何處やな』

故郷の話しに箸の芋の滑るのも忘れて居る、上戸黨は衣食足つてアルコールの匂ひを嗅ぎたくなつたらしい。で低い聲で註文する。

女中は先づ窓の障子を締切りそれからウキスキーのコツプを運んで來た。締切られて始めて障子の外は禁酒國のアメリカなる事を思ひ出した。



下戸黨には蒸菓子を提供された。これも久々で廻り逢ふ親の仇に似て居る。青年黨が競つて摘み上げ、前歯で一太刀二太刀恨む。喰ふ程に恨重なつて来て又一つ又一つ又々一つだ。返り討ちに逢ひ胃酸過多になるぐらゐの事はもとより武士は覺悟の前だ。

横眼で見ると都河さんが眞面目な顔で頗る慎重に仇を打つて居る。氏の目ざす仇は黄いろい「もゝ山」であつた。

酒の話を書いた事ゆゑ、料理店の名は紹介を差控へて置く。

満腹のチョッキのボタンを撫さすり乍ら四五人とぶら／＼と表へ出た。外國の春の夜寒の風に吹かれるのも亦一興だ。この邊は日本人街と見えて菓子屋だの湯屋だのがある。菓子屋の硝子箱の中に子供の時馴染の巻煎餅だの瓦煎餅だのが入つて居る。湯屋の看板には日本字で何々湯と書いてある。悲しき哉いづれの舗も米人の構へに比較して母屋と塵箱程の大小がある。奮發して欲しい。

一たい米國では夜は總ての店は締つて仕舞ふのであるが、ドラツグストリアだけは起きて居る。藥店であるからいつ何時病人の用が出来まいものでもないその備への爲めである。大概、町の角にある。その一軒へ入つた。日本人が居たからである。買物は二の次、在米同胞と話がしたいからである。

店の中には藥の外にいろ／＼の小間物が置いてある。それを見廻り乍ら話をする。相手は實に小

じんまりした洋服を着た、和いだ青年であつた。

『排日熱といつてもあれは、人氣を取らうとする。ある派の政治家とハースト系の新聞が煽動するので、騒ぎ程事實は大きいものではないやうです。然し以前よりは余程一般に強くなつて來ました。——いかがはしい女ですか——それはこの頃官憲の力でシヤトルには一人も居なくなりました。大變結構です——何といつてもアメリカは拜金の國ですから、金で裁判が自由になります。殊に女に非常に權力を持たしてあります。女の人殺しは大概死刑になりません。精神錯亂とか一時的の發作とかいふ名で庇ひ少しの間精神病院へ入れて許します。』

白子屋お熊女史なども米國へ生れたらよかつたのである。

『泥棒も中々つかまりません。短銃といふものを持つてる上に巡查が命を大事にするから君子危きに近寄らずですねえ。ハ、ハ、それに米人といふ奴は妙な氣質の國民で、泥棒などが追かけられ家へ逃げ込むと、その家の者が面白がつて逃がしてやるといふ風です。腕白氣質といはうか野性的といはうか、活動寫眞の活劇の手傳ひでもしてやるぐらゐの積りでせう。泥棒も仲々文化的で大仕掛です。そうそう、ついこの間シヤトルにこゝろいふ事がありました。ある銀行の前へ強盜が活動撮影機を据えつけてピストルをボンボン打つて中へ打ち入りました。然も白晝です。そして堂々と金庫の中を開けて



在金そつくり持つて行きました。見物は**大勢集つて**たのです。然しそれがまさか本當の物取りとは誰一人氣付きません。悠悠自動車で引上げたあとで始めて撮影は彼等の手法だつたと判つて、それから騒ぎ出したやうな次第です』

話が長くなり、素手で歸る譯に行かなくなつた。俺は、夜闇の中で時の數字が光るといふ**ダイヤ時計**を、子供の爲めに二弗半で買ふ。京都の縮緬屋さんがダイヤモンドのネクタイピンを買ふ。もつともその値段が日本金で六七圓のものだから縮緬屋さんの財布の爲心配してやらなくてもよい。

歸りの途が判らなくなつた時、丁度左側に熊が足をびよん／＼跳乍ら横笛を吹いてるイルミネーションを發見した。しば／＼その前を自動車で通らされたので覺えるともなく覺えて居た。これを目印にしておよそどの邊にわれ等のホテルが在るかを判断する事が出來た。それから横着になつて靴磨きに靴を磨かせたり、カフェのとまり木にとまつたりして歸つた。

その夜は原稿の書き上げに徹夜して仕舞つた。一夜書物卓の赤いかさに向つてペン畫筆を走らせた。夜の更けるに従つて家の事がしみ／＼と思ひ出される。まだ始めた許りの旅なのに、こんな事ではしようがないではないかと叱り乍ら、やつぱり想ひ出される。想ひ続け書き續けて夜がしら／＼と開けた。







窓のカーテンを片寄せて外を覗くと、何處も彼處も洗濯石鹼を切つたやうな無味な四角い建物許りか望まれる。それに日の出の前の白光が冷たくさびしい。建物と建物の上に下の方に細く味の無い直線の道が発見される。さすらひ人のような形をした洋人が稀に一つ二つ見出される。窓外の遣る瀬ない景色をその儘にして俺は口を結んで必死に原稿を描き上げた。出發前十五分程で漸く出来上つた。何は扱置き心を温めねばならぬ。風呂だ、風呂だ。バスルームへ入つて浴槽へしたゝか熱湯を注ぎ入れずんぶり入つた。身體の赤味の上の部分を除き他の部分の湯は白磁色の浴槽に透けて青味を帯びて居た。

下の大廣間へ下りると仲間は食事も済み、出發を急いで居た。俺はその儘自動車に乗つた。

## ◎第二十信

汽船發着所へ着いた。出船に間がある。そこに店を開いてる休憩所の婆アが一寸氣に入つた。普通の米人のように棘々しくいかつく無い。日本人の婆アに對するやうな親みが出た。そこで、『おい。婆アさん。今日はいゝ天氣だね』

日本語でそう云つた。したら判つたか判らないか知らぬが兎も角



『オー、イーエス』

と頷いた。其處に雑誌類が澤山並べてあつた。

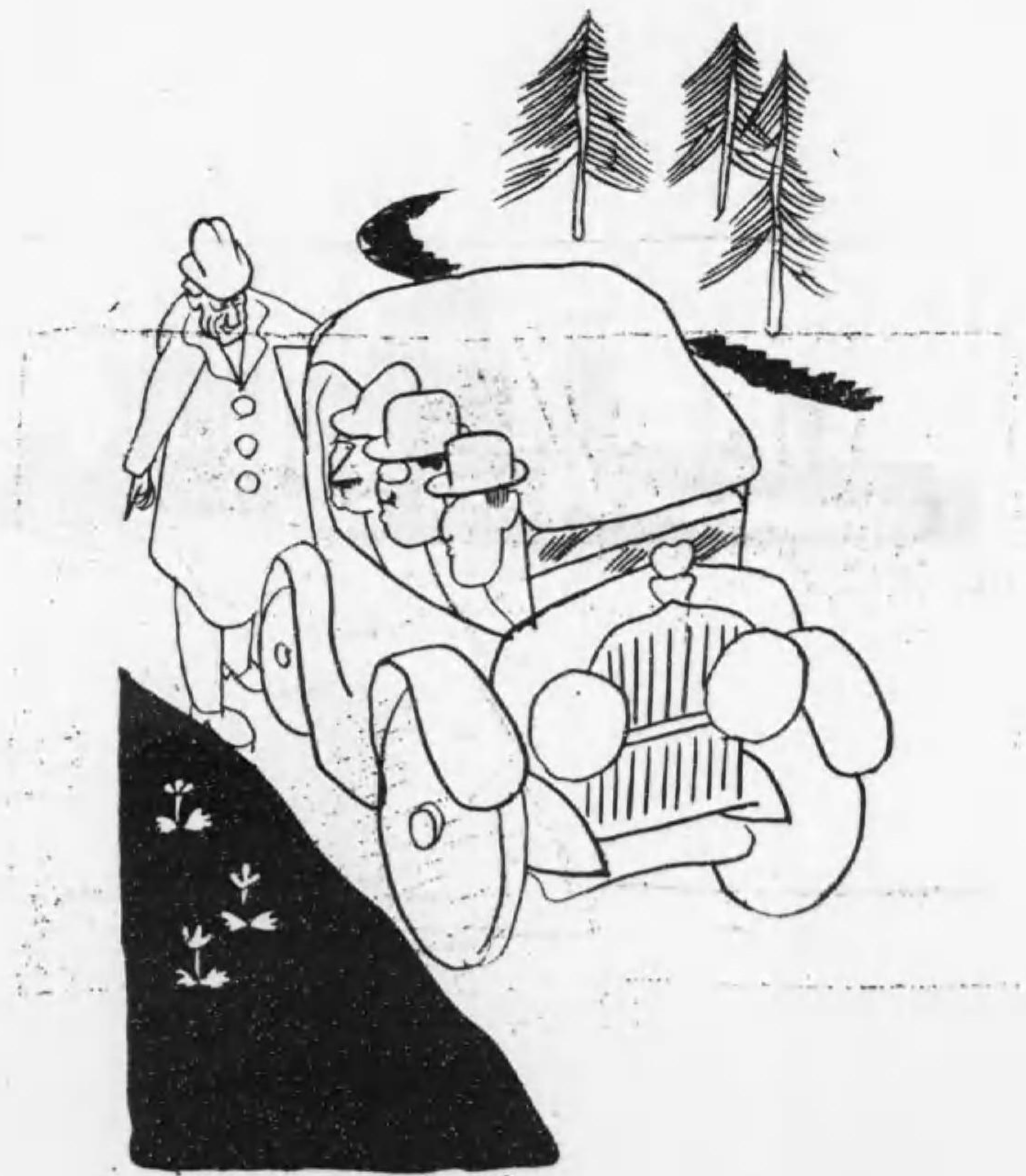
辰夫がその一冊を買つて前にシヤトルで買った雑誌と揃へて抱へ扱代金を拂はうとすると、婆ア間違へて三冊分の代價を請求した。辰夫が澁々拂つた。

船は出る。俺だけ朝飯を喰はないのを發見して、唐茄子屋のおやぢが食券を買つて呉れた。食堂で一人で食べた。大きな鰈のフライを呉れた。うまかつた。満足して買切りの船室へ入つて熟睡した。

ビクトリアへ着いたといふので起こされる。こゝは英領カナダの一部。船を上ると大勢ホテルの客引や、案内人が剣突を喰はすような聲で怒鳴つてる。われ等は自動車に分乗し、ぐるぐると廻る。海岸を通る。ゑにしだに似た矮木が叢をなしてゐる。避暑地で夏は賑やかだそう。それから米國の建物よりは手重くていくらか雅味のある建物をいくつか見せられる。面白くも無い。何とかいふ鑛山王の邸宅の庭に、鳥や婦人の形に樹が刈込まれて居るのを日本と同じやうな事をするんだなと想つて見る。

最後に州議事堂の前の庭へ連れて行つて、

『これがビクトリアで一番早く咲いた花です』







と黄いろい草花を示す。案内者中々冗談ものだ。

船が出る。俺は又眠る。浪が静かだから眠りよい。時々眼を覺して窓から覗くと兩側は丁度シャトルへ着く前通つた内海と同じような景色——崖があつて太古からのアメリカ松が密林をなしてゐる。處々に赤い屋根のバンガローがある。別段起きて注意しなくてもよさそうな景色。

夕方起されて船へ出るとバンクバーの夜景が眼の前に單色の石版畫のように現れて居る。シャトルより小ぢんまりして纏つてゐる。灯のついた大きな浮標が船近く横切つて過ぎる。

明るい税關の建物へ入り調べが済んで出ようとする、一群の小さいレディーが並んで都河さんに日本式と西洋式と間ぐらゐるの角度のお叩頭をしてゐる。よく見ると日本の婦人だ。日本人の紳士が出て挨拶する。婦女界愛讀者の出迎へだそう。俺の肩を叩くものがある。もと俺と同じ勤め先に居た鈴木悦君だ。女流作家俊子女史と何處か外國へ行つたと聞いてたが、こゝに居たのか、相變らず、兩方から鼻筋へ近寄つて鋭く見える眼が愉快そうに笑はしてゐる。

再會を約し、バンクバーホテルへ入る。

鈴木君が頓て迎へに来て都河さん諸共電車へ乗せた。釣草が高く手が届かぬ、支那料理屋へ案内される。土地の邦字新聞記者連の御馳走だ。鈴木君も土地で新聞記者を勤め日本人會の囃將だそう